

塩崎遺跡群 (6)

石川条里遺跡 (5)

—— 塩崎遺跡群市道篠ノ井南253号線地点 ——

—— 石川条里遺跡消防塩崎分署地点 ——

1991・3

長野市教育委員会

塩崎遺跡群(6)

——市道篠ノ井南253号線地点——

1991・3

長野市教育委員会

序

社会生活の変化とともに「ものの豊かさ」から「心の豊かさ」が求められる今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできない国民的財産であります。市民生活の充実、公共の福祉という目標を達成するため、民間・公共を問わず多くの土木工事が実施されることとなりますが、その陰で失われてゆく埋蔵文化財に対し、私達はその保護・保存と活用という点において大きな責務を負っているともいえるでしょう。

平成2年度、篠ノ井地区においては、長野市の実施する公共事業に伴い、埋蔵文化財緊急発掘調査を2件実施することとなりました。その一つは元年度からの継続事業である市道篠ノ井南253号線の道路改良であり、いま一つは、長野南消防署塩崎分署建設事業であります。両事業とも、緊急性・公益性ともに高く重要な事業であり、また、埋蔵文化財包蔵地として周知される「塩崎遺跡群」「石川条里遺跡」に位置することから、事業の実施により破壊される部分に関して、記録保存の措置を講ずることが不可欠とされました。ここに公刊いたします『長野市の埋蔵文化財第39集』は、その調査の成果を報告書として刊行するものであり、文化財に対する一層の理解と、地域文化向上のための一助としてご活用頂ければ、この上ない喜びであります。

最後に、発掘調査の実施にあたり、ご尽力いただいた関係諸機関、調査に参加頂いた地元の皆様、そして、報告書刊行に至るまでにご指導・ご援助を賜った各位に対して、厚くお礼申し上げます。

平成3年3月

長野市教育委員会

教育長 奥村秀雄

例 言

- 1 本書は、長野市（篠ノ井支所土木課担当）が施工する市道篠ノ井南253号線道路改良事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、平成元年度から平成2年度にかけて、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが実施し、その期間は、平成元年11月20日～平成2年1月30日・平成2年6月14日～29日である。
- 3 発掘調査地は、長野市篠ノ井塩崎字二枚橋181・松節2431他に所在する。
- 4 遺跡名および調査地点は、「塩崎遺跡群・市道篠ノ井南253号線地点」とする。
- 5 本書作成においては、調査員が分担して整理作業を行ない、本文執筆に関しては、矢口忠良と青木和明が共同で行なった。
- 6 調査によって得られた諸記録は、長野市教育委員会（埋蔵文化財センター）で保管している。

目 次

序		図1 塩崎遺跡群と周辺の遺跡群……………	6
例言		図2 塩崎遺跡群・篠ノ井遺跡群の調査位置…	9
		図3 調査地点の位置と字名……………	11
		図4 調査地点全体図……………	12
I 調査の経過		図5 調査地点全測図①……………	13・14
		図6 調査地点全測図②……………	15・16
		弥生時代前期併行	
		図7 49号住居覆土中出土遺物……………	22
		弥生時代中期後半	
		図8 18号住居出土遺物……………	22
		図9 18号住居……………	22
		図10 37号住居……………	23
		図11 37号住居出土遺物……………	23
		図12 48号住居……………	23
		図13 48号住居出土遺物……………	24
		図14 49号住居……………	24
		図15 49号住居出土遺物……………	26
		図16 その他の遺構・検出面出土遺物……………	27
		弥生時代後期とその直後	
		図17 4号土壇……………	28
		図18 4号土壇出土遺物……………	28
		図19 7号土壇……………	28
		図20 7号土壇出土遺物……………	28
		図21 10号住居……………	29
		図22 10号住居出土遺物……………	29
		図23 15号住居……………	31
		図24 15号住居出土遺物……………	31
		図25 22号住居……………	33
		図26 22号住居出土遺物……………	33
		図27 23号住居……………	34
		図28 23号住居出土遺物……………	34
		図29 24号住居……………	35
		図30 24号住居出土遺物……………	37
		図31 30号住居……………	38
		図32 30号住居出土遺物①……………	38
1 調査の契機……………	1		
2 発掘調査経過……………	1		
3 調査の体制……………	5		
II 塩崎遺跡群の環境			
1 位置と範囲……………	6		
2 発掘調査歴……………	7		
III 調査内容			
1 調査の概要……………	10		
2 弥生時代前期併行……………	22		
3 弥生時代中期後半……………	22		
4 弥生時代後期とその直後……………	28		
5 古墳時代中期……………	71		
6 奈良・平安時代……………	72		
IV まとめ……………	115		

図33	30号住居出土遺物②	39	図70	15号溝出土遺物	69	図106	21号住居	90
図34	30号住居出土遺物③	40	図71	15号溝	69	図107	21号住居出土遺物	90
図35	31-イ号住居	41	図72	溝状遺構	70	図108	28号住居	91
図36	31-イ号住居出土遺物①	41	図73	溝状遺構出土遺物	70	図109	28号住居出土遺物	91
図37	31-イ号住居出土遺物②	42	古墳時代中期			図110	29号住居	92
図38	31-ロ号住居	42	図74	25号住居	71	図111	29号住居出土遺物	93
図39	31-ロ号住居出土遺物	42	図75	25号住居出土遺物	71	図112	33号住居	94
図40	41号住居・45号住居	43	図76	19号住居	71	図113	33号住居出土遺物	94
図41	41号住居出土遺物①	44	図77	19号住居出土遺物	71	図114	34号住居	96
図42	41号住居出土遺物②	45	奈良・平安時代			図115	34号住居出土遺物	96
図43	45号住居出土遺物①	47	図78	1号住居	72	図116	35号住居	97
図44	45号住居出土遺物②	48	図79	1号住居出土遺物①	72	図117	35号住居出土遺物	97
図45	43号住居出土遺物	48	図80	1号住居出土遺物②	73	図118	36号住居出土遺物	98
図46	43号住居	48	図81	2号住居	74	図119	36号住居	98
図47	44-ロ号住居	49	図82	2号住居出土遺物	74	図120	38号住居出土遺物①	98
図48	44-ロ号住居出土遺物	50	図83	3号住居	75	図121	38号住居出土遺物②	99
図49	47号住居	50	図84	3号住居出土遺物	77	図122	38号住居	99
図50	47号住居出土遺物①	53	図85	5号住居出土遺物①	78	図123	42号住居	101
図51	47号住居出土遺物②	54	図86	5号住居	78	図124	42号住居出土遺物	101
図52	50号住居	54	図87	5号住居出土遺物②	79	図125	54号住居	101
図53	50号住居出土遺物	56	図88	7号住居	80	図126	54号住居出土遺物	101
図54	2号溝出土遺物	57	図89	7号住居出土遺物	81	図127	55号住居	102
図55	2号溝	57	図90	8号住居	82	図128	55号住居出土遺物	102
図56	3号溝	59	図91	8号住居出土遺物	82	図129	58号住居・59号住居	103
図57	3号溝出土遺物	59	図92	9号住居	83	図130	58号住居出土遺物	104
図58	4号溝	60	図93	9号住居出土遺物	83	図131	59号住居出土遺物	106
図59	4号溝出土遺物①	60	図94	11号住居	84	図132	11号土壇出土遺物	107
図60	土器棺墓出土遺物①	62	図95	11号住居出土遺物	84	図133	11号土壇	107
図61	土器棺墓出土遺物② ・4号溝出土遺物②	63	図96	12号住居	85	図134	8・9号土壇出土遺物	107
図62	5号溝	64	図97	12号住居出土遺物	85	図135	9号土壇	107
図63	5号溝出土遺物	64	図98	13号住居	86	図136	B区-1号溝・2号溝	112
図64	8号溝	66	図99	13号住居出土遺物	86	図137	B区-1号溝断面・土層	113
図65	8号溝出土遺物	66	図100	16号住居	87	図138	B区-1号溝出土遺物	114
図66	11号溝	67	図101	16号住居出土遺物	87			
図67	11号溝出土遺物	67	図102	17号住居	89			
図68	13号溝出土遺物	68	図103	17号住居出土遺物	89			
図69	13号溝	68	図104	20号住居出土遺物	89			
			図105	20号住居	89			

I 調査経過

1 調査の契機

昭和63年7月7日付で、昭和64年度における埋蔵文化財保護のための開発事業計画を照会したところ、同月長野市篠ノ井支所土木課より「市道篠ノ井南253号線拡幅改良事業」計画の回答があった。昭和64年度では粟佐橋橋脚部分の工事が予定されていた。この部分には地形及び表面採集調査で遺跡の存在が予想されていなかったが、万一の場合を考え、工事に先立って立会い調査を実施したが、遺物・遺構の確認はなかった。平成元年度以降実施分については、周知の塩崎遺跡群松節遺跡・石川条里遺跡を横断する主体部工事・付帯工事が計画されていたため、発掘調査を実施し、記録保存等の保護策が必要である旨通知するとともに、発掘調査計画書・同予算書を担当課に提出する。現地協議・文化財保護法の規定による書類の提出等をもって、本調査に向け始動する。

2 発掘調査経過

[平成元年度]

11月20日(晴) 表土掘削・運搬。
調査器材搬入。

11月21日(晴) 残土処理。遺構
検出。SB1・2・4開始。

11月22日(晴) 遺構検出面、上
層の約5cmを除去。SB1・2・
4継続。

11月24日(晴) 残土処理。SB
1・2・4継続。SB3開始。SB
4完掘。

11月27日(晴) SB1・2・3
継続。SB5開始。SB2完掘。

11月28日(晴) SB1・3・5
継続。SB6開始。重複遺構検出
のため平板測量。

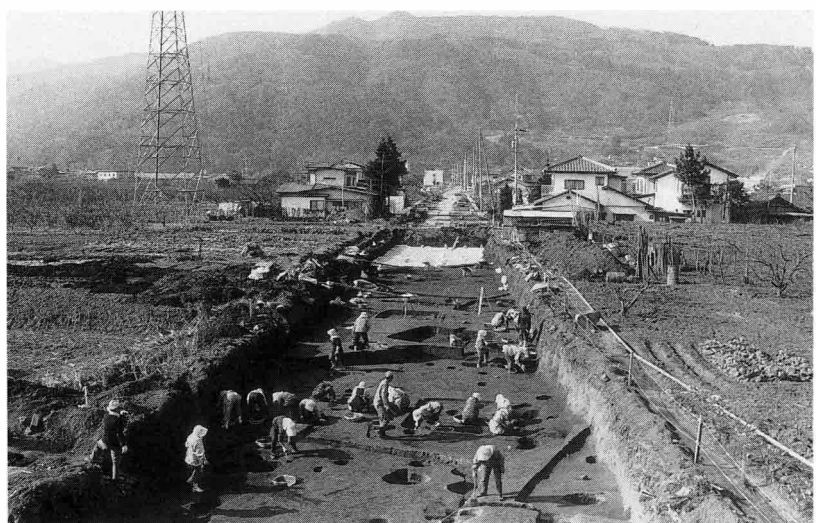
11月29日(曇) SB1・6・3・
5完掘後、清掃、写真撮影。SB
7～10開始。

11月30日(晴) SB5・7・10
継続。

12月1日(晴) SB5・7・10
完掘後、清掃、写真撮影。SB11・



平成元年度調査 表土除去



遺構の掘り下げ

12・16・17開始。

12月4日（晴）遺構上層除去。
残土処理。遺構検出。SB11・12・
16・17継続。SB11・12完掘後写
真撮影。SB14・15開始。遺構実測。

12月5日（曇）SB15～17継続。
SB16・17完掘後写真撮影。SB22・
28、SD1・2開始。

12月6日（晴）SB15・22・28、
SD1・2継続。SB23・24開始。
SB22内横転土器は土器棺墓か。

12月7日（晴）SB23・24完掘。
SB13以東の遺構清掃後写真撮影。
SD1・2継続、SB25（のちに2
軒重複遺構と判明 イ・ロ）18～21・
31開始。

12月8日（昨夜降雪あり・晴）
SB22・25－イ・ロ・28、SD1継続。S
B11・21床面再検出。SB11は2軒の
重複遺構。SB26・27・29開始。

12月11日（晴）SB11－ロ・22・
28・29、SD1・2継続。SB15・31
を中心に周辺遺構の清掃後写真撮
影。SB30・32・35開始。遺構実測。

12月12日（曇/雪）SB29・30・
33～35継続。SB32・36、SD3～
6開始SB29・32完掘。遺構測量。

12月13日（晴）SB30・33～36、
SD4～6調査継続。SB30・33～
37完掘後写真撮影。SB33平板測
量。SB37～39開始。

12月14日（曇/雨）SB38・39、
SD3・5継続。SK1開始。SD1
～3清掃後写真撮影。SB39完掘。
雨にて午後の作業中止。

12月15日（曇）今朝降雪あり除
雪等実施。SB38、SD4・5継続。

12月18日（曇/雨）SB38、SD



遺構の検出



遺構の掘り下げ



遺構の掘り下げ

4・5 継続。SB40、SD 7 開始。
SD 5・6、1～3 清掃後写真撮影。
検出面上層除去。遺構測量。

12月19日（晴）残土処理。遺構
検出SB40、SD 7 継続。SB41、S
K 2・3 開始SK 2・3 完掘後写
真撮影。土器棺墓の取りあげ。土
層実測。検出面上層除去。

12月20日（晴）SB41、SD 7 継
続。SB43・44、SD 8・9 開始。
SD 6、SB41 土層実測。

12月21日（晴）SB43・44、SD
7～9 継続。残土処理。

12月26日（晴）SZ 1 継続。土
層実測・遺構実測。土器洗浄。

12月27日（晴・曇）SZ 1 継続。
SK 9 開始。完掘後写真撮影。土
器洗浄。機器材の整理。

1月8日（晴）検出面、上層除
去。SD 1 継続SB51・57、SD10、
SK10開始。残土処理。遺構検出。
土器洗浄。

1月9日（晴）上層除去継続。
残土処理。SZ 1 完掘後写真撮影。
SB51・57継続。SB52・54開始。

1月10日（雨）作業中止。

1月11日（曇）SB51・52・54・
57完掘後写真撮影。SB53、SD11
～13開始。崩落土処理。遺構検出。

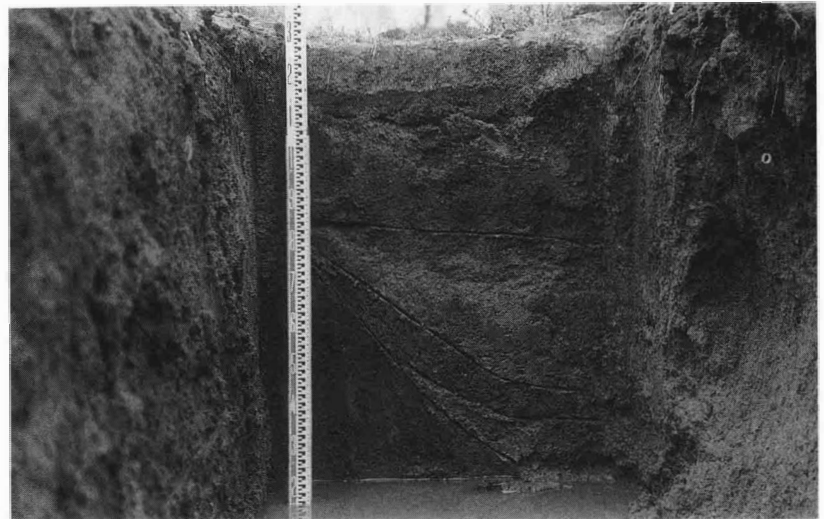
1月12日（曇）SB11～13継続。
SD14、SK 8、ピット群開始。B
トレンチ設置。土層実測。

1月16日（雪）検出面上層除去。
残土処理。遺構検出。土器洗浄。
降雪続き午後作業中止。

1月17日（晴・曇）上層除去作
業継続。除雪・排水作業。残土処
理。SD12・13、トレンチ調査継



平成2年度 試掘作業



試掘坑内の土層



B区 表土除去

続。SD9～12清掃後写真撮影。SB53、SK9開始。完掘。

1月18日（晴・曇）上層除去作業。残土処理。遺構検出。SB55・56、SD16、SK8開始。遺構実測。

1月19日（雨）作業中止

1月22日（晴・曇）SB54・56、SD16継続。SD15・17開始。

1月23日（曇）除雪・残土処理。SB54・56、SD15・17、SK9・11完掘後写真撮影。SK18開始。

1月24日（曇）SB56以西の遺構検出。SB58、SK17・19開始。上層実測。

1月25日（曇）除雪。SB58、SD18～20完掘後写真撮影。SB59開始。C・Dトレンチ設置。土層実測。

1月26日（雪・晴）除雪。トレンチ調査継続。SB59完掘後写真撮影。上層実測。SB54・55精査。

1月29日（曇・雪）トレンチ調査継続。土器洗浄。器材の撤収。

1月30日（曇）土層実測。遺構実測。発掘作業終了。

[平成2年度]

5月14日（曇）水田部分に関する試掘調査実施。

6月14日（晴）表土除去。残土処理。遺構検出。

6月15日（晴）昨日の作業継続。溝跡（SD1）上部砂質土除去。

6月18日（晴）表土除去。SD1埋土の除去。Aトレンチ設定。

6月20日（曇）残土処理。SD2、B・Cトレンチ継続完了。西に試掘坑設定。

6月21日（曇）作業継続。土層実測。

6月22日（晴）SD1・2継続。SD2完掘後写真撮影。

6月25日（晴）SD2継続。

6月26日（雨）作業中止。

6月27日（曇）SD1・2最下層土除去。廃土除去。

6月28日（曇）SD1・2完掘後写真撮影。廃土除去。

6月29日（曇）土層実測。遺構実測。埋め戻し機器材撤収。発掘作業終了。



B区 遺構の掘り下げ



B区 遺構の掘り下げ

3 調査の体制

長野市教育委員会埋蔵文化財センターの直轄事業として実施し、組織・業務分担は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会教育長	奥村秀雄
総括責任者	長野市埋蔵文化財センター所長	水沢国男
庶務係	主幹・所長補佐	小山正(契約・出納事務担当)
〃	職員	青木厚子(〃)
調査係	調査係長	矢口忠良(平成元年度調査主任)
〃	主事	青木和明(平成2年度〃)
〃	〃	千野浩(遺構・遺物整理)
〃	〃	飯島哲也(〃)
〃	職員	中殿章子(調査担当・〃)
〃	〃	横山かよ子(遺物整理)
〃	〃	今井悦子(〃)
〃	専門主事	小松安和(〃)
〃	〃	中沢克三(〃)
〃	〃	大室昂(調査担当・〃)
調査員	原正樹(調査担当) 寺島孝典(調査担当) 矢口栄子(遺物実測) 塚越久美子(遺構製図)	
	小林伸子(遺構製図) 森泉かよ子(遺物実測)	

調査参加者 高橋清子・宮崎好子・高沼千恵子・北沢友江・春原波子・池田尚夫・中島ふじ子・春日幸子・千葉はるい・高橋綾子・宮崎和子・山崎吉子・風間孝子・小島まさ美・北沢節子・風間つね子・北田つるみ・久保田仁太郎・清水清次・久保田邦夫・風間いそえ・宮崎龍子・山岸礼子・風間かやの・春原すみ江・風間まち子・田中たけ・岸田武子・西沢けさ江・風間小雪・井堀政子・宮崎ちと世・風間キイ子・風間君子・美谷島正子・山口節子・風間政二・宇都宮富栄・大田豊一・内山直子・西沢乾・北沢やすい・矢島秀子・北村利雄・矢島喜和子・駒村より子・山田令子・橋爪孝次(以上平成元年度)

大田豊一・北村利雄・三宅利正・西沢乾・南沢伸三・南沢近登・三宅計佐美・内山直子・矢島秀子・清水節子・塩原恵美子・岩崎弘子・吉沢澄子・山本恵美子・梶明美・高橋綾子・高橋清子・宮崎和子・岸田武子・田中きよ江・後藤平一(以上平成2年度)

整理参加者 徳成奈於子・岡沢治子・池田見紀・小泉ひろ美

遺構測量委託 (有)写真測図研究所

以上、直接発掘調査に参加された方々のほかに、作業員の募集にご協力頂いた関係区長の皆様、天幕設営地・駐車場・飲料水等提供いただいた(株)千代田精密工業・高沼弘氏、そして工事関係の篠ノ井支所土木課・(株)北信土建・(株)川中島建設の担当者からは発掘調査の実施に際し、多大なご援助をいただいた。記して感謝申し上げます。

II 塩崎遺跡群の環境

1 位置と範囲

千曲川は、長野盆地南縁部に至ると平地空間内を大きく蛇行し、犀川による扇状地形に影響を受けながら流下する。その最初の大きな蛇行部両岸に顕著な自然堤防の形成が認められ、塩崎遺跡群は左岸上流部に位置する。左岸の自然堤防はさらに下流に6 Kmほど延び、篠ノ井遺跡群・横田遺跡群を内包する。塩崎遺跡群と篠ノ井遺跡群を便宜上聖川を境に分離しているが一連の性格を有している。塩崎遺跡群は南北約2 Km・東西最大幅600 m範囲に展開するものと予想され、西及び北側は古い時代に千曲川の流れ込みによって形成された後背湿地になる。ちなみにこの周辺の字名をみると、河川敷では河原をもちいたものが多く、自然堤防上では屋敷・(中)条・(松)節・一本木・(伊勢)宮・山崎等があり、集落に基づいたもの、耕地割・地形に由来するものが主であり、後背湿地の凹地には原・川・田・畑・柳を付した字名が多くなることから推察するに古代からの土地利用にそれほど変化がないものと思料される。

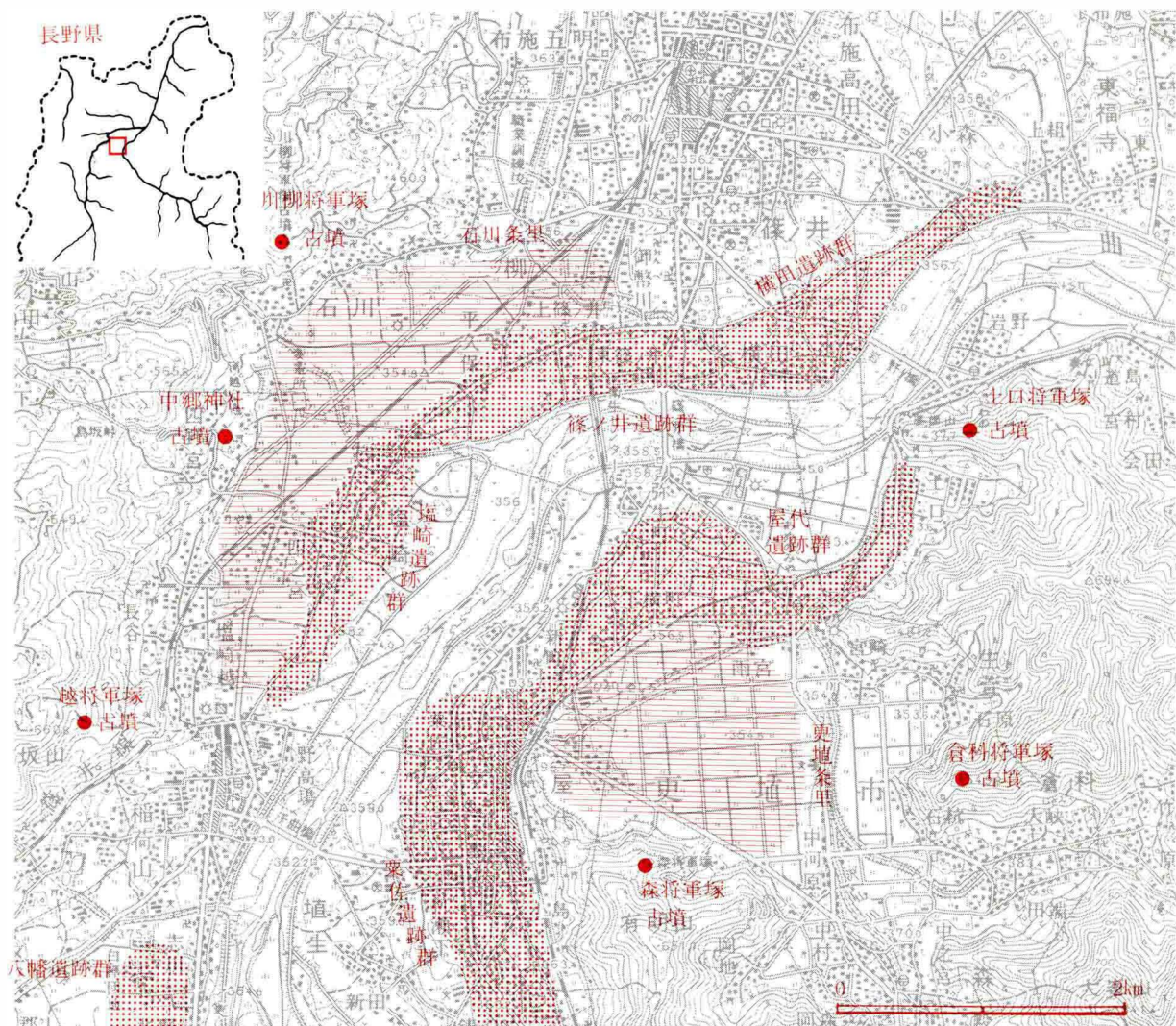


図1 塩崎遺跡群と周辺の遺跡群 (1 : 50,000)

2 発掘調査歴

長野盆地南縁の遺跡分布をみると、そのほとんどが弥生時代以降の遺跡である。また更埴市の佐野川による扇状地上の遺跡がとぎれとぎれに散在するのに対し、千曲川兩岸ではそれが形成した自然堤防上と山麓部にかけ遺跡面が帯状に展開するのを特色としている。またこれらの自然堤防上の遺跡は、弥生時代から平安時代にかけての複合遺跡であり、規模・密集度・内容等において千曲川水系における屈指の遺跡群を構成している。その模様を石川条里遺跡周辺とこれに關与する聖川沖積面千曲川自然堤防上における遺跡の調査歴を瞥見する。

塩崎遺跡群「松節遺跡」

昭和26年度調査 地籍名：篠ノ井塩崎字松節 文献：森嶋稔・米山一政「古代・中世」『更級埴科地方誌』昭和53年、森嶋稔「銅鐸及び石製模造鉢」『篠ノ井市指定文化財調査報告書』昭和51年

広鋒銅利器・同石製模造品の出土遺構を求めて発掘調査が実施された。古墳時代住居址が確認されている。

塩崎遺跡群「中条遺跡」

昭和41年調査 地籍名：篠ノ井塩崎字中条 文献：丸山徹一郎「善光寺平南縁の自然堤防上の遺跡について」『信濃』Ⅲ-26-51昭和49年

弥生時代後期箱清水式期の住居址1軒を検出した。

塩崎遺跡群（市道松節小田井神社地点）

昭和60年度調査 地籍名：篠ノ井塩崎字松節・中条・伊勢宮・一本木 文献：長野市教委『塩崎遺跡群Ⅳ-市道松節-小田井神社地点遺跡』昭和61年

調査では192軒以上の住居址と土壌113基・溝址33ヶ所等が検出され、中でも弥生時代中期前半の住居址とともに31基の人骨・副葬品を伴う木棺墓が検出されている。

塩崎遺跡群（塩崎小学校地点）

昭和52～54・58年度調査 地籍名：篠ノ井塩崎字町屋敷 文献：長野市教委『塩崎遺跡群』昭和58年・『塩崎遺跡群(2)』昭和54年・『四ツ屋遺跡・徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)』昭和55年

塩崎小学校校舎地からは、弥生時代中期後半以降の遺構（住居址86軒・建物址3軒・柱穴群3ヶ所・土壌7基・方形周溝墓2基・溝址5ヶ所・井戸址4基）が確認されており、弥生時代中期後半の方形周溝墓の存在及び奈良時代の遺構・遺物が多いのに注目される。方形周溝墓は形状から後出のものとの説もあるが、今のところこの地では最古のものである。奈良時代の遺構は住居址を主に建物址（倉庫址）も確認され、「専司」と刻字された須惠器坏の出土等から官衙址的性格の強い遺構と考えられる。

塩崎遺跡群「殿屋敷遺跡」（角間地区市道路改良事業地点）

昭和62年度調査 地籍名：篠ノ井塩崎字殿屋敷・南下枡 文献：長野市教委『塩崎遺跡群Ⅴ』昭和62年
弥生時代後期・奈良時代・平安時代住居址22軒・溝址6本・土壌5基・中世の井戸址18基が確認されている。この他近くから猿投系系の灰釉陶器茶壺形蔵骨器の逸品が出土しており火葬墳墓址の存在が考えられている。

篠ノ井遺跡群（大規模自転車道地点遺跡）

昭和54年度調査 地籍名：篠ノ井塩崎字堀ノ内・高畑・五輪 文献：長野市教委『篠ノ井遺跡群』昭和55年
弥生後期・古墳前期・奈良平安集落跡で、住居址31軒、方形周溝墓1基等が検出されている。

篠ノ井遺跡群（聖川堤防地点）

昭和55年より調査継続中 地籍名：篠ノ井塩崎字五輪・浄光・北畑 文献：平成3年度報告書刊行予定



弥生時代後期後半箱清水期から古墳時代前期の生活遺構のほか墓址群が検出され、方形周溝墓・円形周溝墓・前方後方形周溝墓・土器棺墓等ありバラエティに富んでいる。

篠ノ井遺跡群（市道山崎唐猫線地点）

昭和63年度調査 地籍名：篠ノ井塩崎字姫宮・五倫・宗旨坊・浄光 文献：長野市教委『篠ノ井遺跡群Ⅱ』
平成元年

弥生後期・古墳前期・奈良平安時代集落跡。住居址17軒、土壙23基、溝址5本を検出している。自然堤防形成をさかのぼる時期と推定される縄文時代前期の遺物が少数ながら出土し、その性格が注目される。

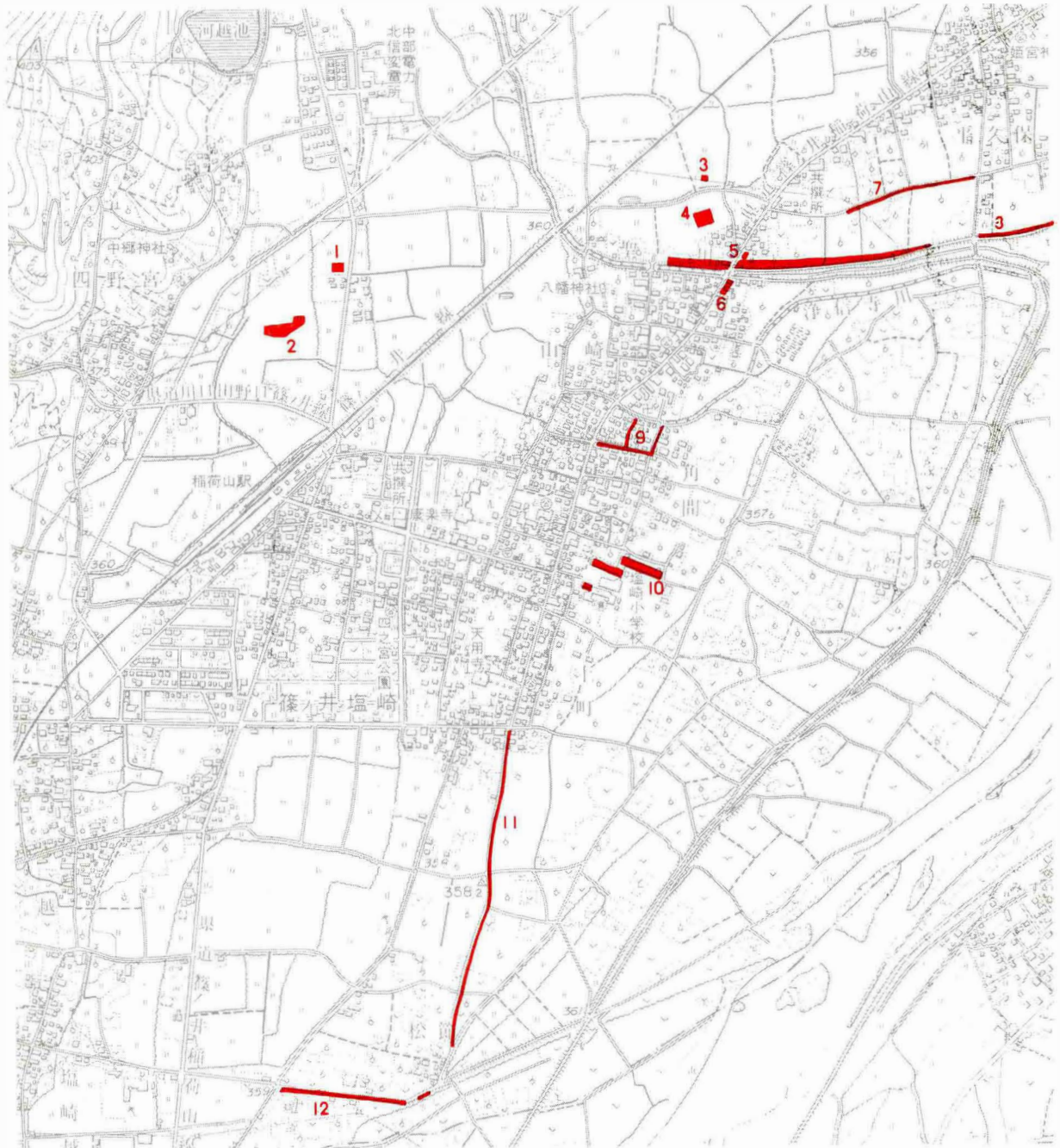


図2 塩崎遺跡群・篠ノ井遺跡群の調査位置 (1 : 13,000)

- | | | | |
|-------------|-------------|------------------|-------------------|
| 1. 消防塩崎分署地点 | 2. 楢下地点 | 3. 中部電力鉄塔地点 | 4. 市営塩崎体育館地点 |
| 5. 聖川堤防地点 | 6. 聖徳橋地点 | 7. 市道山崎唐猫線地点 | 8. 大規模自転車道地点 |
| 9. 市道角間線地点 | 10. 塩崎小学校地点 | 11. 市道松節小田井神社線地点 | 12. 市道篠ノ井南253号線地点 |

篠ノ井遺跡群 (中部電力北信坂城線鉄塔地点・長野市営塩崎体育館地点)

平成元年度調査 地籍名：篠ノ井塩崎字中田・北畑 文献：長野市教委『篠ノ井遺跡群III』平成2年
 縄文時代晩期終末から古墳時代前期の遺構遺物が確認され、中でも5号土壌は土器棺墓と考えられている。

III 調査内容

1 調査の概要

昭和60年度実施した市道松節小田井神社線地点が、塩崎自然堤防を縦断した調査であったのに対し、今回の調査は南縁部を横断するものであった。前者は延長約700m・幅6mに亘り、住居址192軒・土壇113基・溝址33ヶ所以上が確認され、今回は延長250m・幅12mの間に住居址57軒・土壇12基・溝址19本が存在し、さらに塩崎小学校地点・殿屋敷遺跡等を考え合すれば相当の遺構数が予想される大密集集落遺跡群といえる。

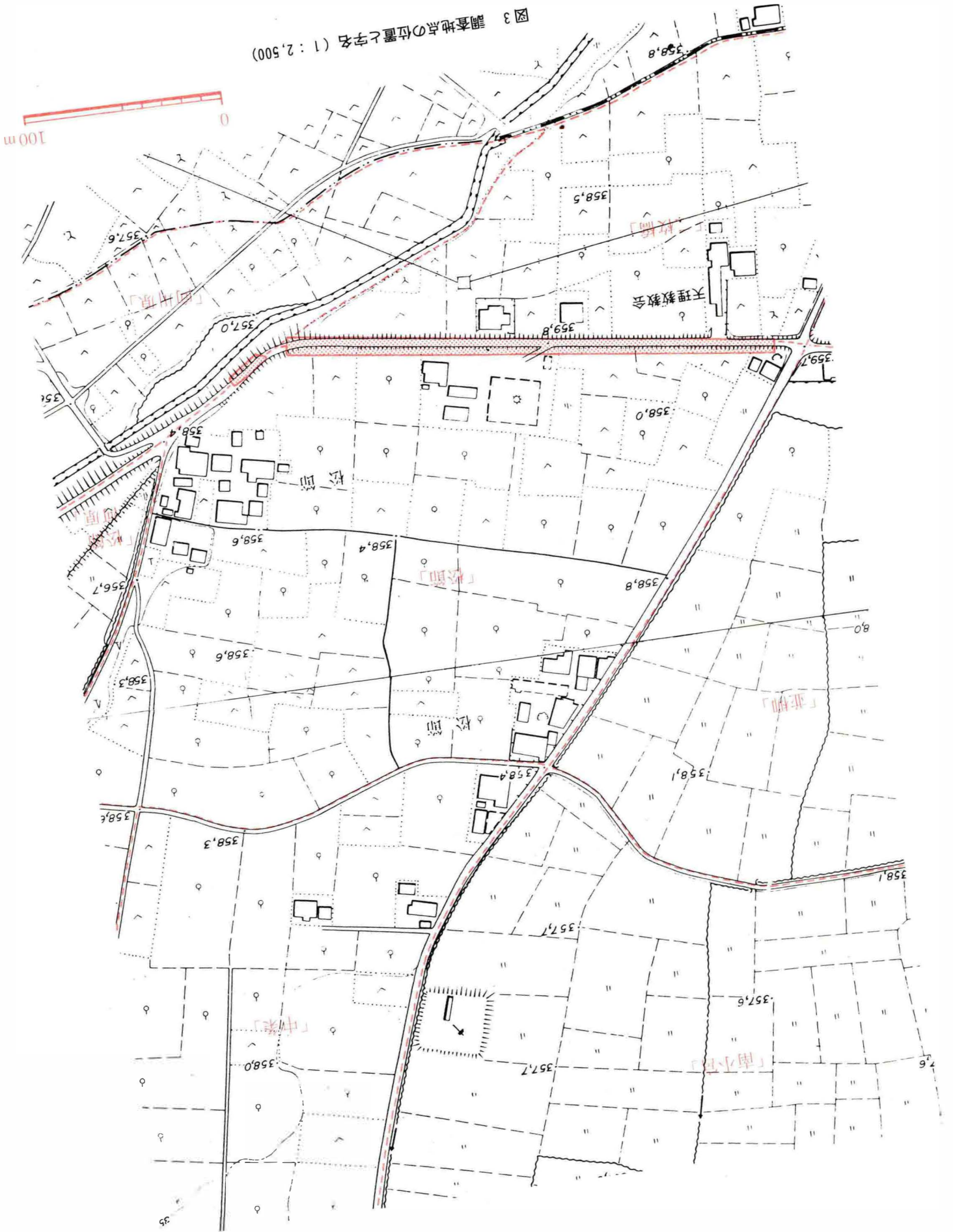
今回の調査は2年次にわたり実施し、平成元年度は道路本体事業部の東半分を、2年度では西半分と自然堤防東縁の取り付け道路部を対象とした。

遺構の分布は、昭和60年調査所見と同様自然堤防東縁側に集中し、弥生時代から平安時代にかけての遺構が重複関係にある。西方後背湿地とみられる現水田方向に行くに従い、遺構数は漸減し、自然堤防西側1/3は平安時代に限られた遺構を残すものの住居址等生活遺構は認められなくなる。自然堤防西端付近は後背湿地に入るのか、土質が粘質を帯びてくる。現水田面下の調査では遺物包含層はなく、生活遺構は認められない。取り付け道路部では、奈良時代の所産と考えられる溝址2本が確認され、生活域の限界を示すものといえよう。





弥生時代の遺構としては、中期住居址4軒、後期住居址14軒・溝址3本・土壇2基、弥生時代と推定される住居址3軒・溝址4本の総計住居址17軒・溝址7本・土壇2基である。古墳時代では、前期溝址（方形周溝墓）2基・溝状遺構1本、中期住居址2軒に過ぎない。奈良・平安時代では、住居址34軒・溝址8本・土壇6基が検出され、このうち確実に奈良時代に属するものは、住居址8軒・2次調査での溝址2本である。中世のものには井戸址であろう土壇3基が確認されている。時代比定できなかつたものに溝址3本がある。



図3 調査地点の位置と字名 (1 : 2,500)



凡例

-  弥生時代
中期後半
-  弥生時代
後期とその直後
-  古墳時代中期
-  奈良・平安時代

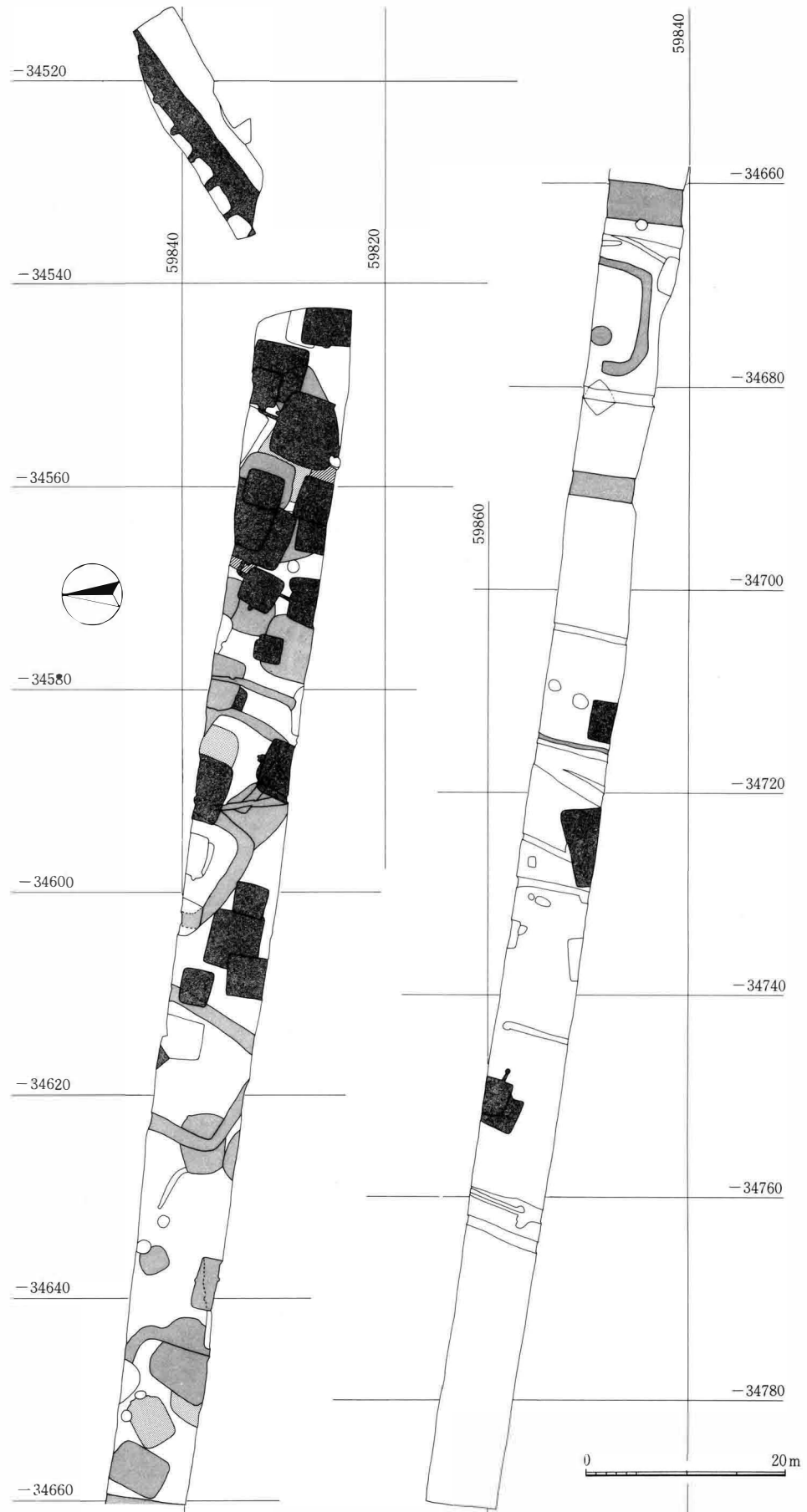


図4 調査地点全体図

(1 : 600)



図5 調査地

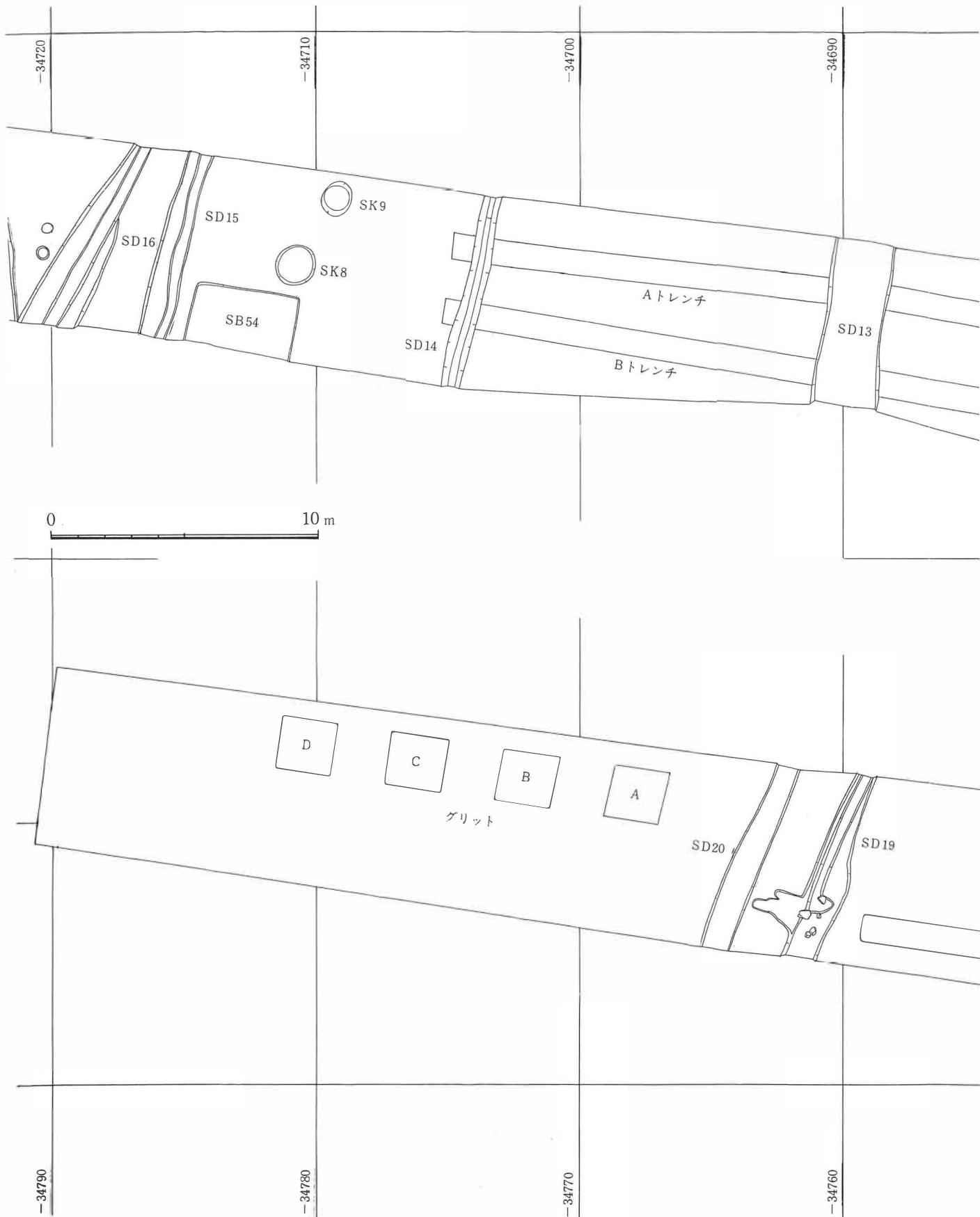


図6 調査地点全測

遺構一覧表①

住居址 (S B)

頁	番号	時期	平面形	主軸方位	規模	カマド・炉	主柱穴	その他施設
72頁	S B 1	奈良平安		N - 85° - W	×	西壁		
74頁	S B 2	奈良平安	方	N - 80° - W	3.6m×3.1m	西壁南寄り		カマド張出し
75頁	S B 3	奈良	方	N - 20° - E	6.6m×6.8m	北壁中央	4本	周溝 煙道2.2m
欠番	S B 4				×			
78頁	S B 5	奈良平安	方?	N - 15° - E	4.3m×	東壁南寄?	4本?	
	S B 6	奈・平?	長方?	N - 80° - W	×2.9m			
80頁	S B 7	奈良平安	方?	N - 70° - W	6.3m×	東壁南寄?		カマド張出し
82頁	S B 8	奈良平安	方?	N - 80° - W	×	西壁		
83頁	S B 9	奈良平安	方	N - 75° - W	5.8m×5.2m	東壁中央	4本	
29頁	S B 10	弥生後期	隅丸長方	N - 70° - E	×4.6m	東柱穴間	4本	
84頁	S B 11	奈良平安	方?	N - 20° - E	×3.3m	北壁中央		煙道1.7m
85頁	S B 12	奈良	方	N - 15° - E	3.0m×2.9m	北壁中央		
86頁	S B 13	奈良	方	N - 65° - W	3.8m×3.9m	西壁	4本	煙道
欠番	S B 14				×			
31頁	S B 15	弥生後期	隅丸長方	N - 70° - W	5.4m×	西柱穴間	4本	
87頁	S B 16	奈良平安	方	N - 75° - W	5.7m×5.5m	東壁中央		
89頁	S B 17	奈良平安	方?	N - 70° - W	6.2m×	西壁	4本?	煙道1.5m
22頁	S B 18	弥生中期			×			
71頁	S B 19	古墳中期			×			
89頁	S B 20	奈良	方?		×			
90頁	S B 21	平安	方?	N - 25° - E	×4.5m	北壁西寄り		カマド張出し
33頁	S B 22	弥生後期	隅丸?		×5.2m			古墳前期土器棺
34頁	S B 23	弥生後期	隅丸長方	N - 20° - E	5.4m×		4本	
35頁	S B 24	弥生後期	隅丸長方	N - 10° - W	8.4m×5.0m		4本	
71頁	S B 25	古墳中期			×			
	S B 26	弥生?	隅丸		×			
欠番	S B 27				×			
91頁	S B 28	奈良平安	方?		4.1m×			
92頁	S B 29	奈良平安	方?	N - 70° - W	6.3m×	東壁	4本?	一部周溝
38頁	S B 30	弥生後期	隅丸長方	N - 15° - E	×6.0m	北柱穴間		炉縁石
41頁	S B 31 - イ	弥生後期	隅丸		×			
42頁	S B 31 - ロ	弥生後期	隅丸		×			
	S B 32	奈・平?	方?		×			
94頁	S B 33	奈良	方	N - 75° - W	3.5m×3.3m	西壁北寄り		
96頁	S B 34	奈良平安	方	N - 85° - W	3.9m×	東壁南寄り		
97頁	S B 35	奈良平安	長方?		×3.0m			
98頁	S B 36	奈良平安	方		4.0m×			
23頁	S B 37	弥生中期	隅丸		×			
98頁	S B 38	奈良	方	N - 75° - W	5.1m×4.9m	西壁中央		
	S B 39	奈・平?	方?		×			
	S B 40	奈・平?	方?		4.2m×			
43頁	S B 41	弥生後期	隅丸長方	N - 90° - E	6.0m×4.4m	東柱穴間	4本	炉土器埋設
101頁	S B 42	平安	方?					

遺構一覧表②

頁	番号	時期	平面形	主軸方位	規模	カマド・炉	主柱穴	その他施設
48頁	S B 43	弥生後期	隅丸方	N - 25° - W	2.9m×2.6m	北壁寄り		
	S B 44-イ	奈・平?	方?		5.1m×		4本?	
49頁	S B 44-ロ	弥生後期	隅丸?		5.1m×	東柱穴間?	4本?	
43頁	S B 45	弥生後期	隅丸		×			
	S B 46	弥生?	隅丸?		×			
50頁	S B 47	弥生後期	隅丸長方	N - 35° - E	6.9m×	北柱穴間	4本	炉土器埋設
23頁	S B 48	弥生中期	隅丸		×			
24頁	S B 49	弥生中期	隅丸長方	N - 65° - E	5.2m×3.6m	中央東寄り	4本	縄文晩期土器出土
54頁	S B 50	弥生後期	隅丸長方	N - 30° - E	5.7m×4.3m	北柱穴間	4本	炉縁石
	S B 51	弥生?	方?		×			
	S B 52	奈・平?	方?		3.7m×			
	S B 53	奈・平?	方		2.9m×2.6m			
101頁	S B 54	奈良	方?		4.1m×			
102頁	S B 55	奈良	方?		7.9m×			
	S B 56	奈・平?	方?		2.8m×			
	S B 57	奈・平?	方?		4.3m×			
103頁	S B 58	平安	方?	N - 75° - W	3.7m×	東壁南寄り		煙道1.4m
106頁	S B 59	平安	方?	N - 65° - W	3.8m×	東壁中央		

溝 (S D) 一覧表

土坑 (S K) 一覧表

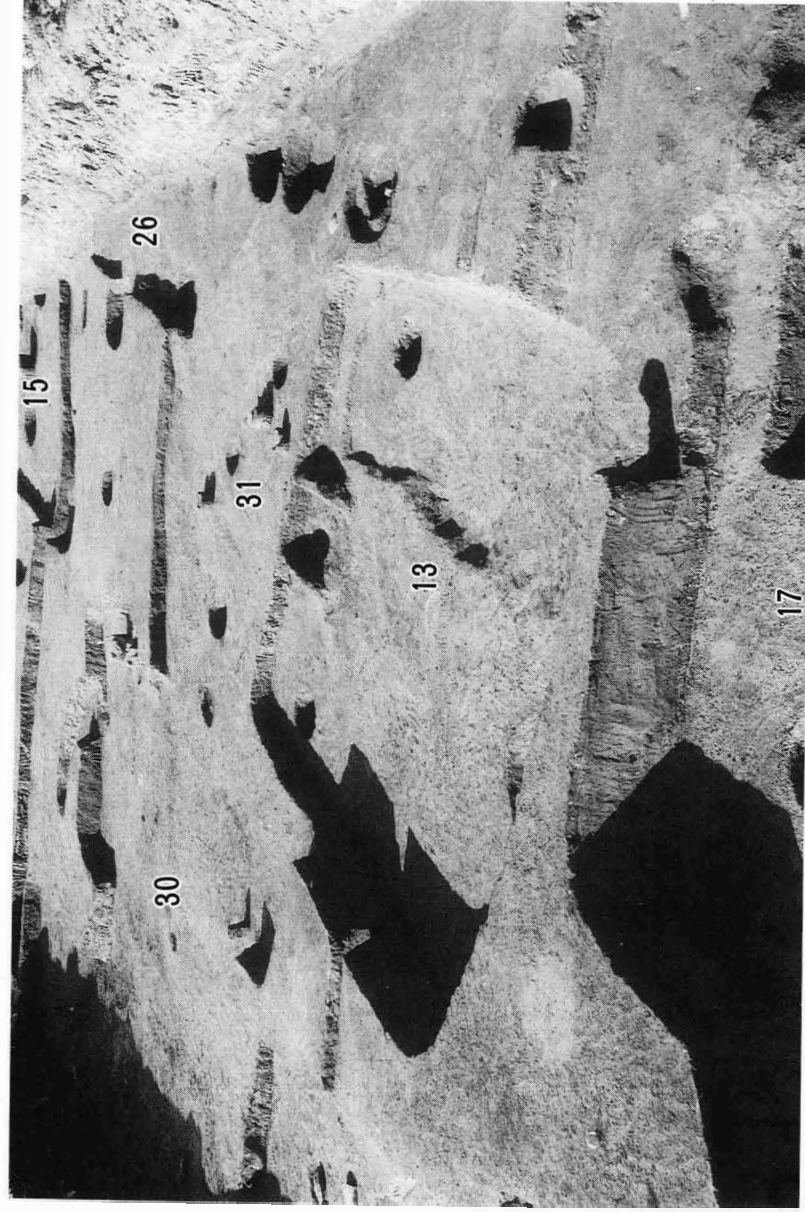
頁	番号	時期	規模・その他	頁	番号	時期	規模・その他
	SD 1	奈・平?	溝幅1.0m 深		SK 1	奈・平?	径1.2m 深
57頁	SD 2	弥生末?	辺9.0m 方形周溝墓 溝幅1.2m		SK 2	奈・平?	井戸 径1.1m
59頁	SD 3	弥生末	幅0.9m 深0.5m		SK 3	奈・平?	井戸 径1.4m
60頁	SD 4	古墳前期	辺11.5m 方形周溝墓 溝幅1.7m	28頁	SK 4	弥生後期	径1.2m 深0.6m
64頁	SD 5	古墳前期	辺13.5m 方形周溝墓 溝幅1.5m		SK 5	中世	井戸 径1.1m 深
欠番	SD 6				SK 6	奈・平?	井戸 径1.3m 深
	SD 7	弥生?	溝幅0.6m 深	28頁	SK 7	弥生後期	径1.7m 深0.7m
66頁	SD 8	弥生末?	方形周溝墓? 溝幅3.1m	107頁	SK 8	中世	井戸 径1.6m
	SD 9	弥生?	溝幅0.5m 深	107頁	SK 9	中世	井戸 径1.3m
	SD 10	?	溝幅0.6m 深		SK 10	奈・平?	径1.5m 深
67頁	SD 11	弥生末	辺11.1m 方形周溝墓 溝幅1.4m	107頁	SK 11	平安	径1.2m 深0.2m
	SD 12	?	溝幅1.2m		SK 12	奈・平?	径1.5m 深
68頁	SD 13	弥生後期	溝幅2.5m 深0.3m				
	SD 14	奈・平?	溝幅0.9m 深	70頁	S Z 1	古墳前期	溝状遺構
69頁	SD 15	弥生末	溝幅0.5m 深0.1m				
	SD 16	奈・平?	溝幅2.7m 深 不整形	62頁	土器 棺墓	古墳前期	S B 22覆土内
	SD 17	?	溝幅0.7m 深				
	SD 18	奈・平?	溝幅0.7m 深				
	SD 19	奈・平?	溝幅1.5m 深 不整形	112頁	B区 SD 1	奈良~ 平安	溝幅2.8m 段差1.3m
	SD 20	奈・平?	溝幅1.2m 深				



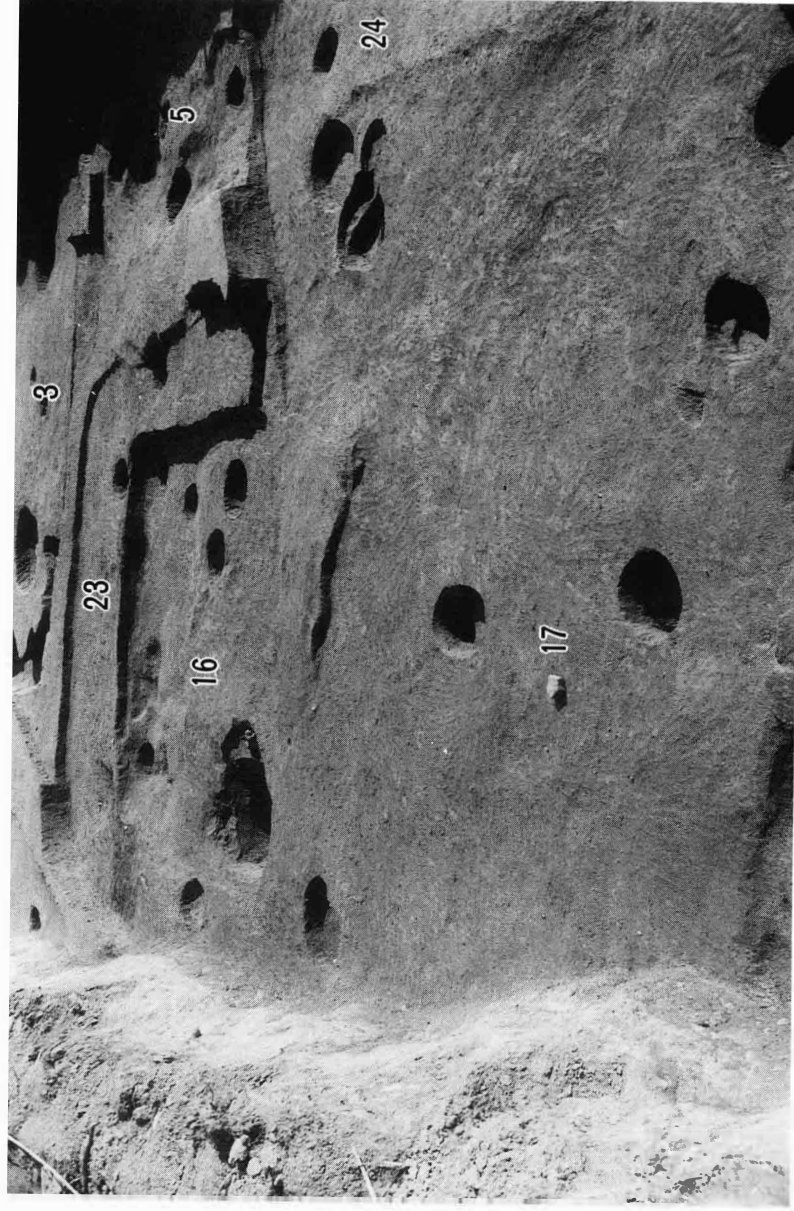
3号住居・10号住居とその周辺（西より） 写真中の数字は遺構番号。以下同



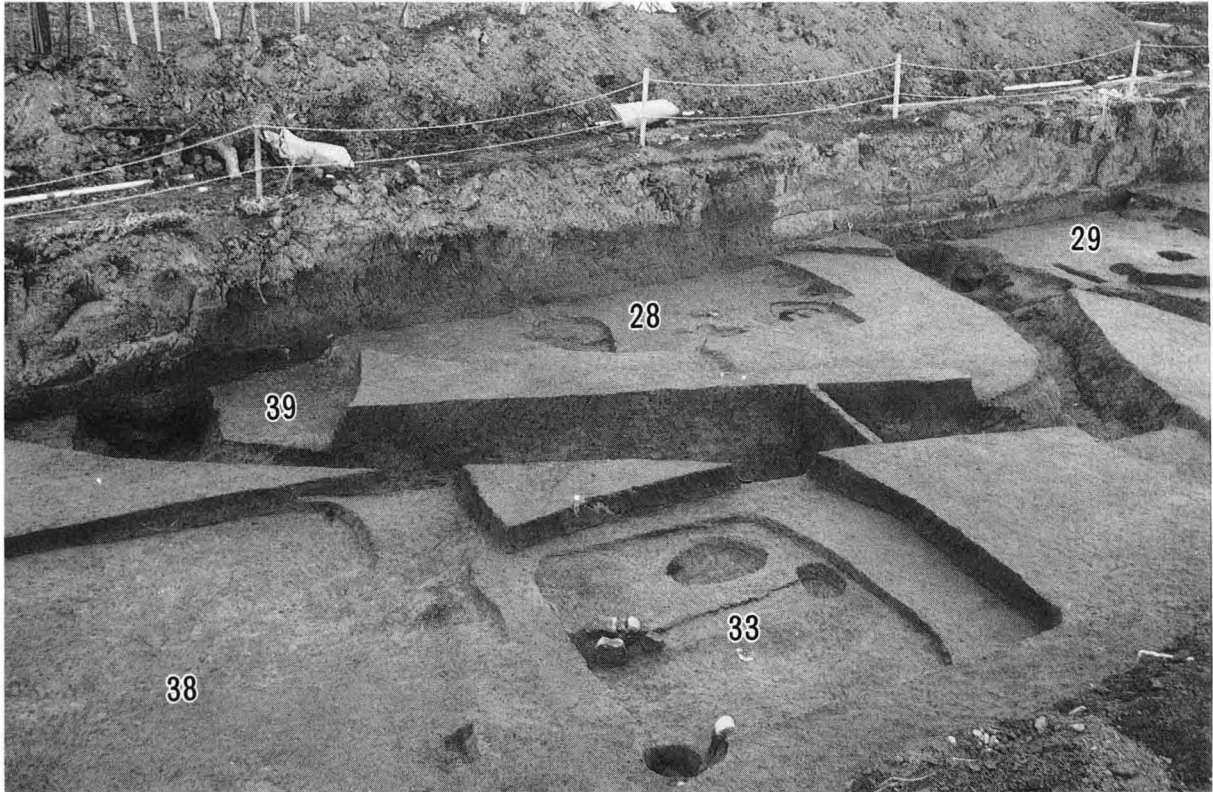
3号住居・10号住居とその周辺（東より）



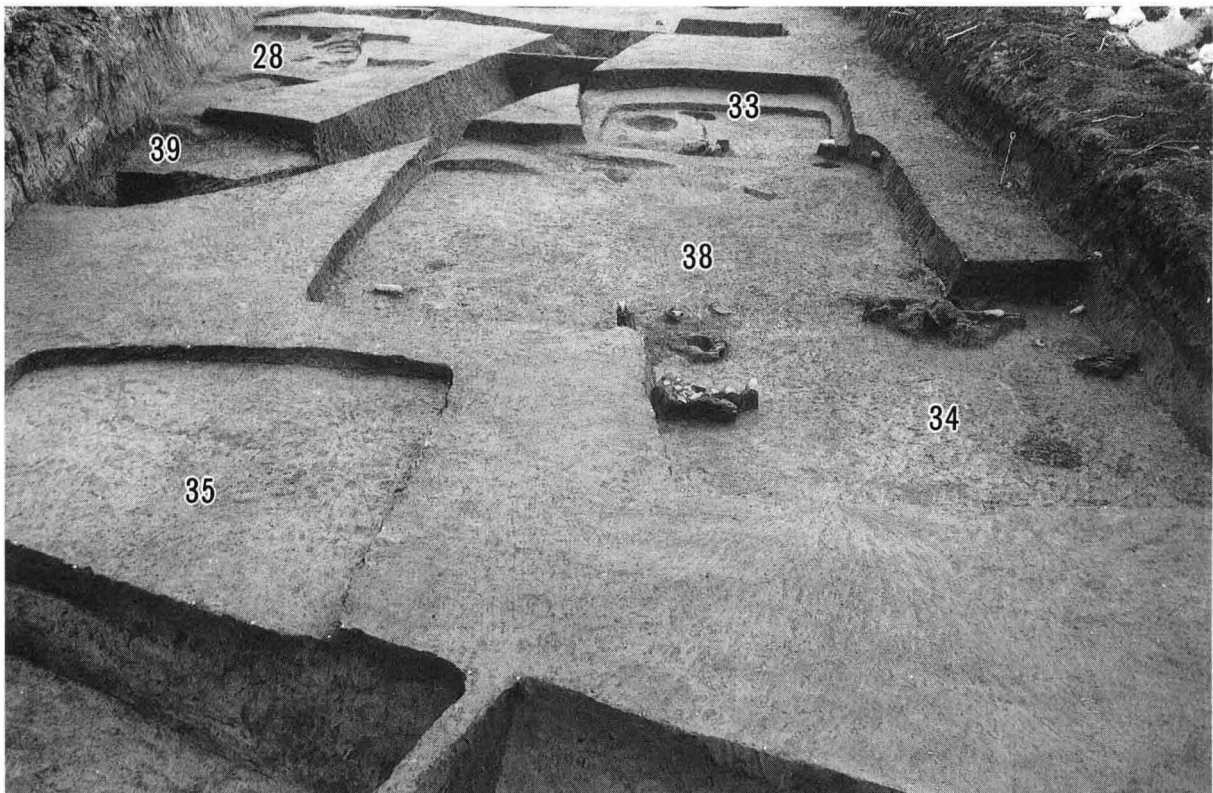
13号住居とその周辺（東より）



17号住居とその周辺（西より）



4号溝とその周辺（南西より）



38号住居とその周辺（西より）

2 弥生時代前期併行

49号住居覆土中出土遺物

1は浅鉢である。口縁部は直立気味に立ち上がり端部は面取りされた後ナデ整形になる。底部は上げ底気味で網代圧痕を残す。全体にヘラミガキ様調整がみられ、ていねいに仕上げられる。口縁部下に幅広の凹線文がみられ、変形工字文と文様帯を構成する。縄文晩期終末氷式の流れのなかで理解される。2・3はともに細密条痕文が施される鉢形土器で、東海地方の影響を受けた在地のものである。

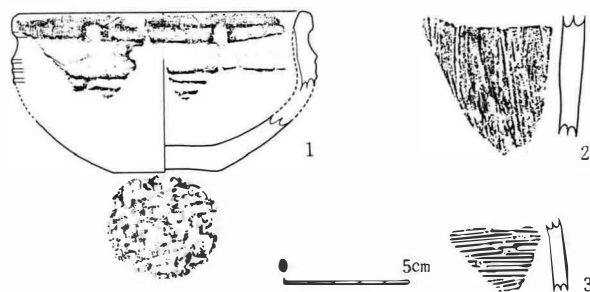


図7 49号住居覆土中出土遺物（ $\frac{1}{3}$ ）

3 弥生時代中期後半

18号住居

3号・5号・23号住居と重複関係にあり、そのほとんどが前記住居に覆われているため全容は不明に近い。北・西・南壁の一部を検出したが、総体に不整形なもので、他の遺構との重複も考えられる。

遺物の出土量は少なく、器種には壺（図8-1・2）・甕（3）・高坏・蓋がある。壺の口縁部形態は2種類あり、ラッパ状に外反するもの（1）と受口状のもの（2）がある。1の口唇部に縄文が、頸部に横線文が施され、2の口縁部文様は縄文地に波状の山形文になる。3の甕は口縁部が内弯気味に直立し、2本の平行する山形文が施され、頸部には1帯の簾状文がめぐる。調整はともにハケ状工具を主体としている。

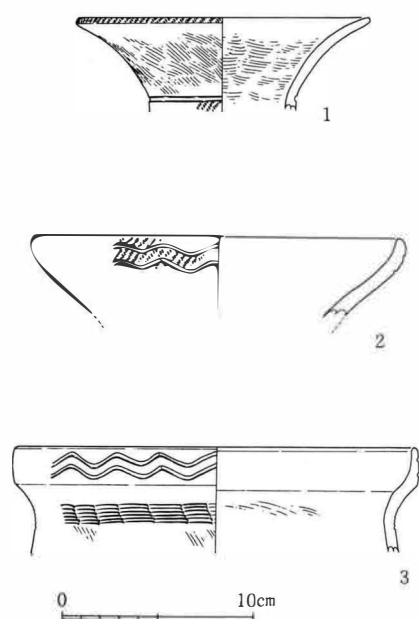


図8 18号住居出土遺物（以下指定以外 $\frac{1}{4}$ ）

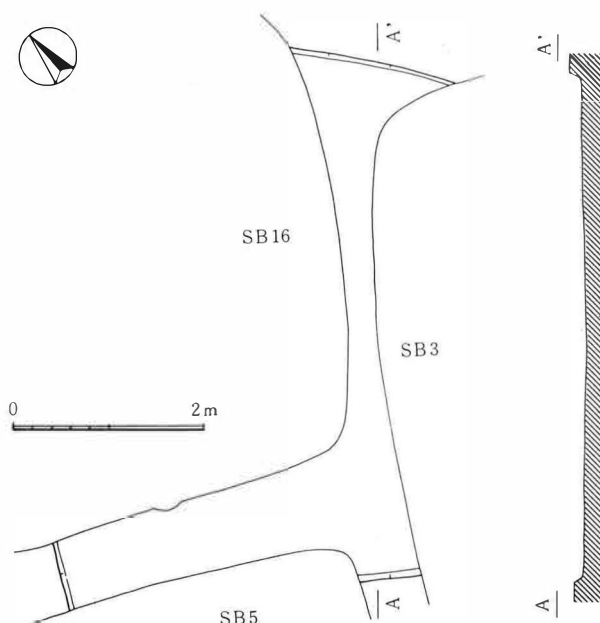


図9 18号住居（以下指定以外 $\frac{1}{6}$ ）

37号住居

調査地中央よりやや東側に位置し、調査では南東部1/4程を検出したにすぎない。西側は古墳時代の39号住居に切られ、北側は2号溝（方形周溝墓）によって破壊を受け、さらに調査区域外へ延びる。検出面からの掘り込みは10cmたらずで、該期のものとしては最も浅く、弥生時代から古墳時代にかけての上砂の堆積が少なかったことをうかがわせる。

遺物の出土量は少なく、器種には壺・甕（図11-1）・高坏（2）がある。他に頁岩製磨製石鏃の未成品（3）が出土している。甕は口縁部が短く外反し、最大径が体部上半にある器形で、口唇部に縄文、肩部に簾状文、体部に縦に交差する羽状文が施される。高坏の坏部はコップ状を呈し、外面は赤色塗彩される。



37号住居（西より）

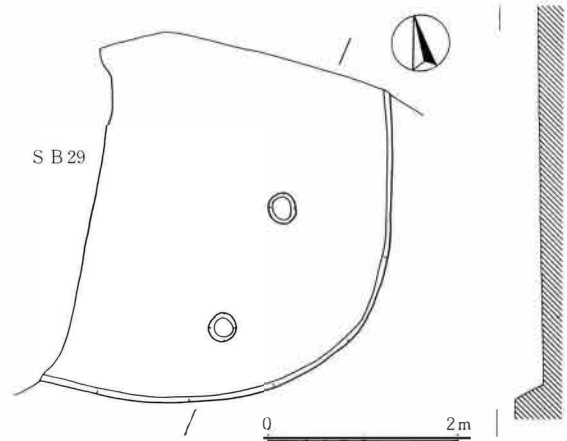


図10 37号住居

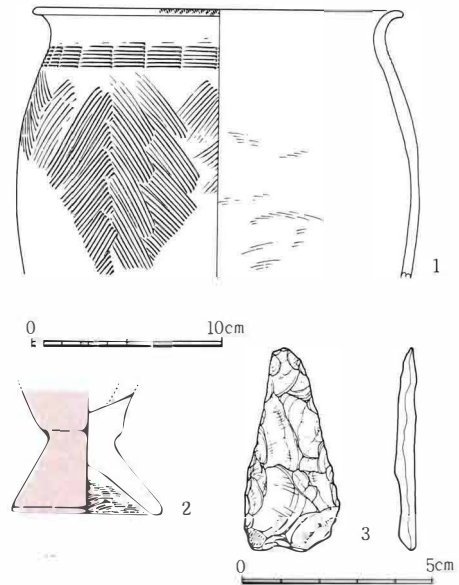


図11 37号住居出土遺物（3-1/2）

48号住居

調査地西側の弥生時代住居址群の中に位置し、南側は調査区域外に延び、東側は弥生時代後期の47号住居により切られる。この住居も検出面から掘り込みは浅く12cmほどである。

遺物の出土量は少なく、それも小破片である。器種には壺（図13-1～4）・甕・高坏がみられる。他に安山岩製磨石（5）がある。

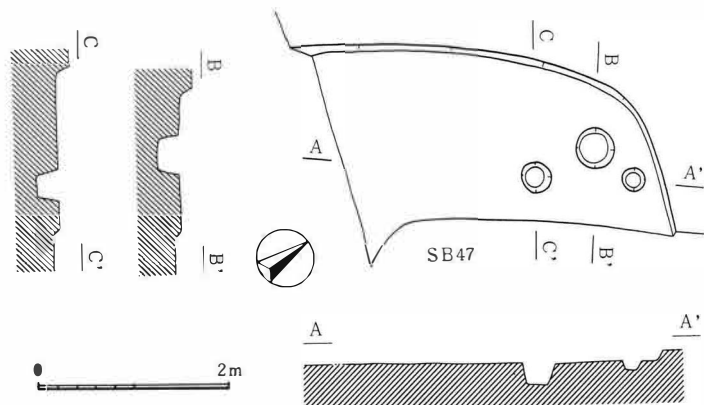


図12 48号住居

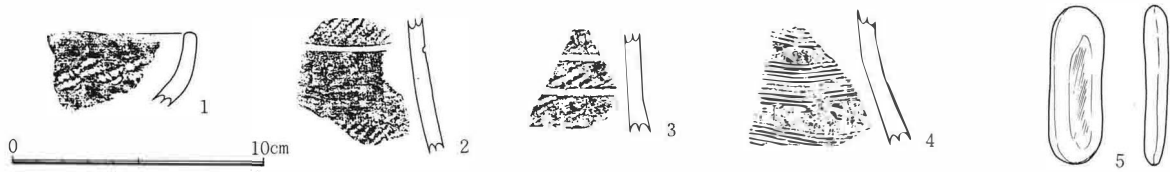


図13 48号住居出土遺物（拓本 以下同）



48号住居（西より）

49号住居

西・北壁の一部を4号・5号土壌により破壊されるほかは全容を検出した。床面は平坦で堅緻である。主柱穴は地床炉を中心とした4個台形配列のものと考えられるが、住居形態・方向とにずれがある。北壁の2個を主柱とすれば、入り口施設柱穴線上の2個をあわせて4個長方形配列になる。地床炉は若干凹み焼土塊化する。

遺物の出土量は少量であるが、全て床面上付近からの出土である。器種には壺（図15-1~3・6~8）・台付甕（5）・甕（9~13）・浅鉢（4）がある。ただし12~14の甕体部片には楯描波状文・簾状文が描かれ、後出の箱清水式期のものである。このほかに粘板岩製磨製石包丁（15）・安山岩製敲打器（16）が出土している。

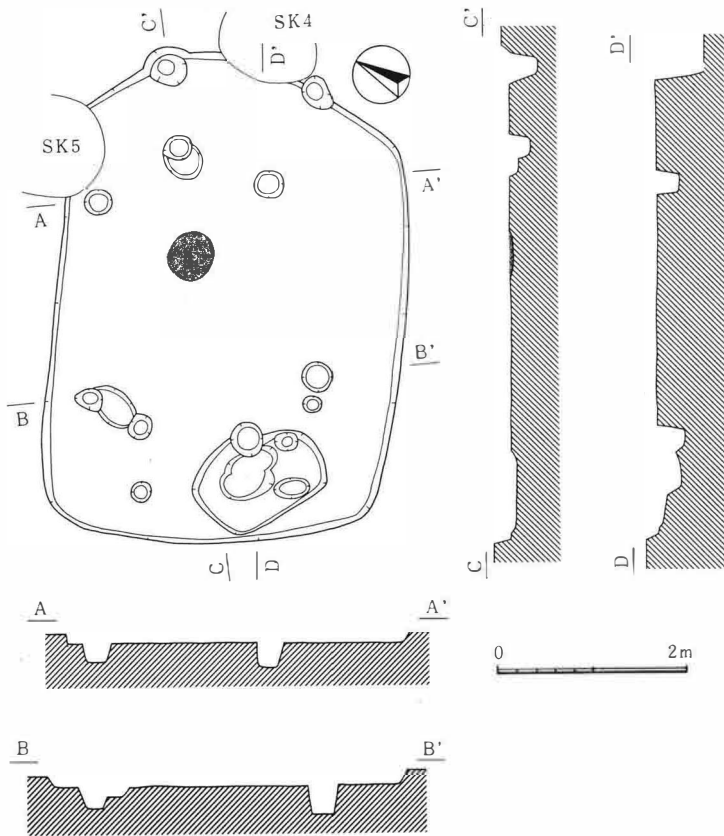


図14 49号住居



49号住居（南西より）



49号住居（北より）

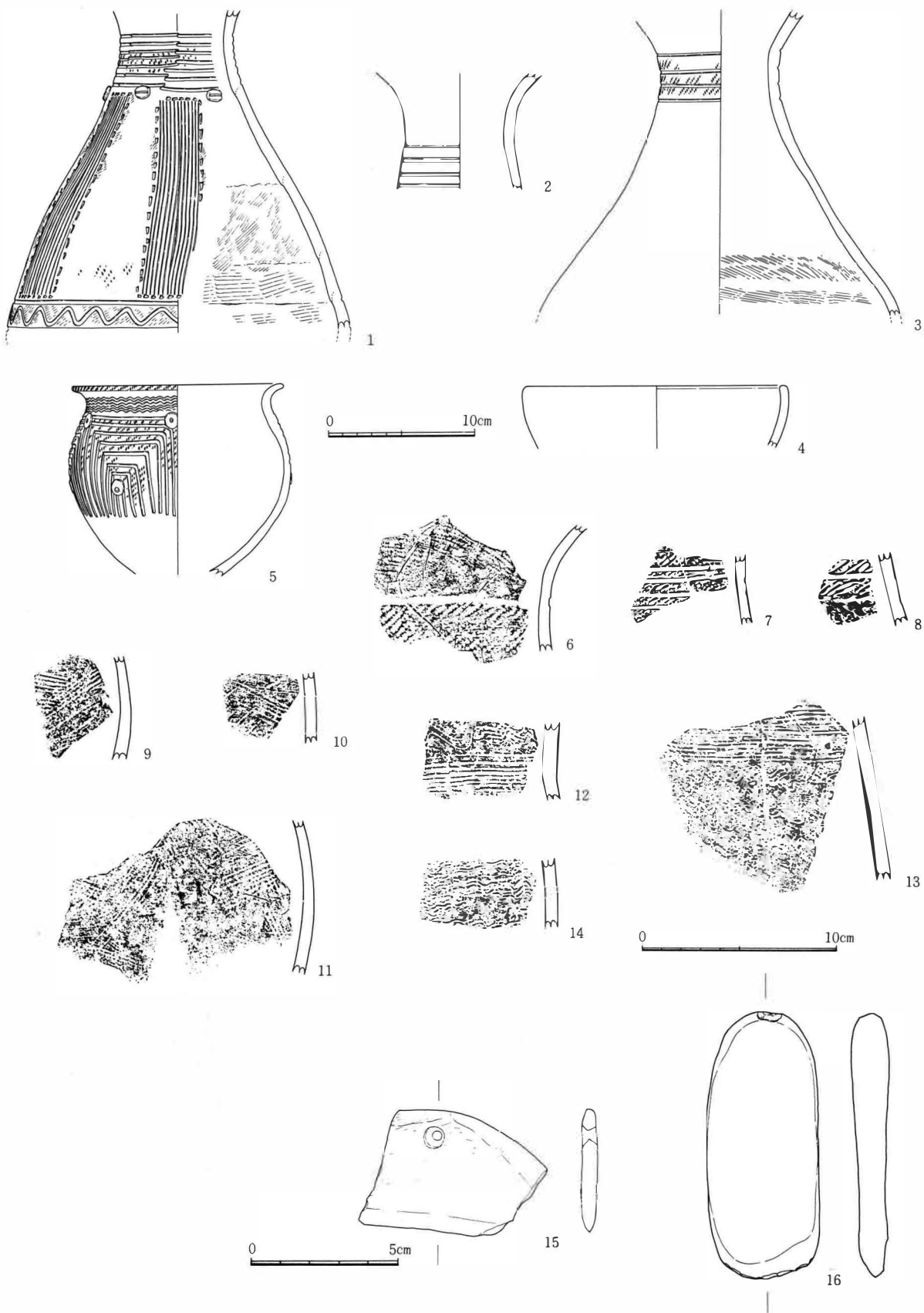
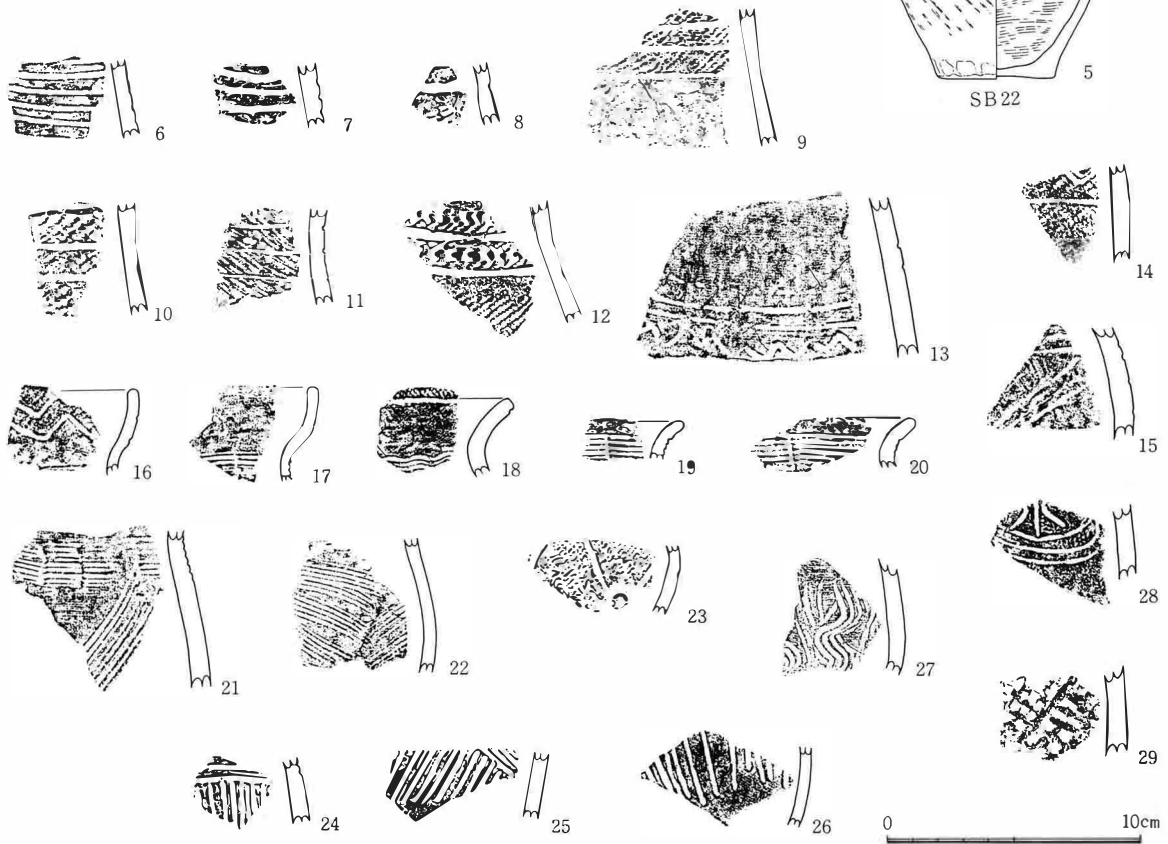
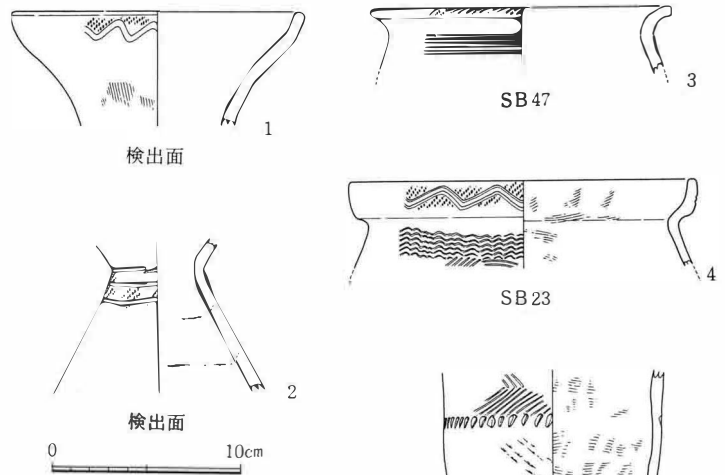


图15 49号住居出土遺物 (15- $\frac{1}{2}$ 、16- $\frac{1}{3}$)

その他の遺構・検出面出土遺物

検出面等からの出土量は多くなく、それも破片出土である。器種には壺（図16-1・2・6～15）・甕（16～26）・高坏・浅鉢・蓋等がある。口縁部文様は端部に縄文が施されるもの（3・18）、立ち上がり部が縄文地に山形文が描かれるもの（1・4・16）がある。壺の頸部文様は縄文地に横位の平行線文を描くものを主体とする。甕の頸部は簾状文を施すものが多いが、波状文のもの（4・18）



もある。体部は交差する斜行条線をもちて羽状文を構成する。5には横位の列点文が描かれる。27～29は前述のものより先行する時期のものであろう。30～32は頁岩製の磨製石鏃である。30は形態を整えた段階での未成品で、他は完成品であらう。

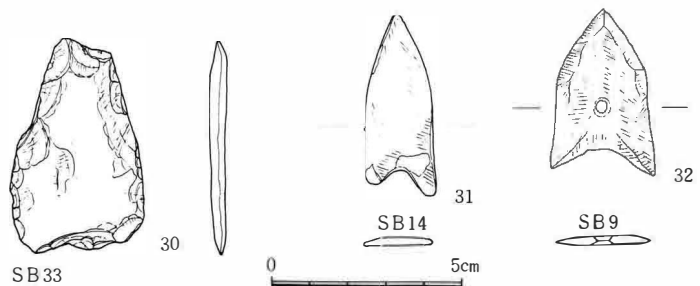


図16 その他の遺構・検出面出土遺物（30～32-1/2）

4 弥生時代後期とその直後

4号土壌

49号住居と重複関係にあり、これよりも後出のものである。形態は卵形を呈し、深さ60cm程である。

遺物の出土量は少量で、器種には壺・甕(図18)・高坏・無頸壺がある。

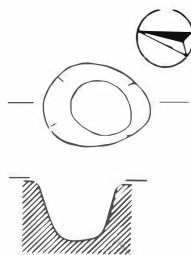


図17 4号土壌

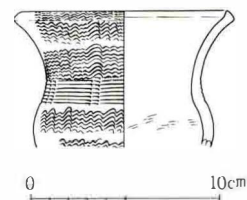


図18 4号土壌出土遺物

7号土壌

形態は径1.4m程の円形を呈し、深さ130cmを測り、中位に段を形成する。底面から20cmほど上部に薄い白色粘土層があり少なくとも2回の使用がうかがえるが用途は不明である。下層から炭化物・焼土の出土が著しかった点注意される。

遺物の出土量は多く、器種等には、壺(図20-1・5~8)・無頸壺(2)・甕(9~16)・高坏(3)・甌(4)・安山岩製凹石(17・18)がある。

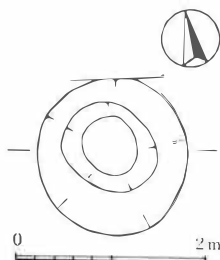


図19 7号土壌

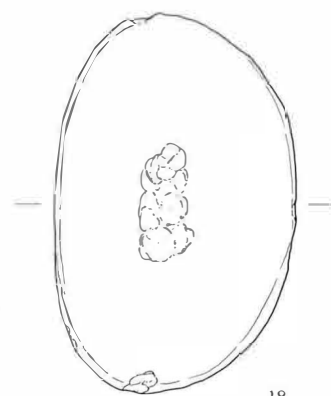
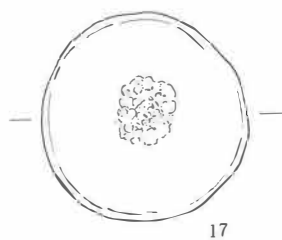
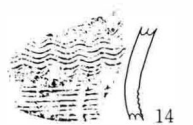
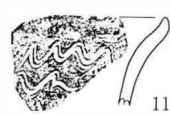
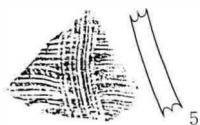
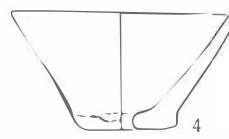
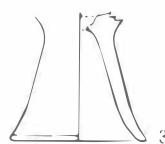
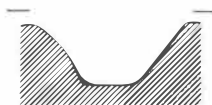
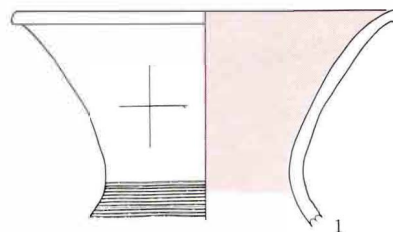
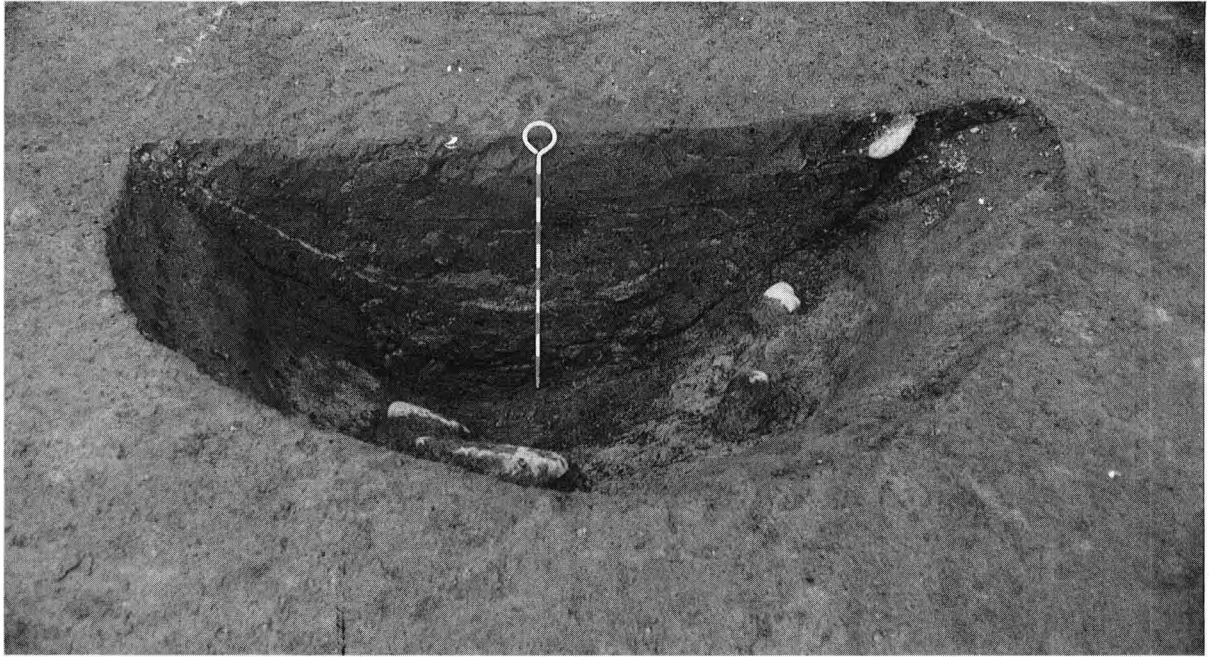


図20 7号土壌出土遺物(17・18-1/2)



7号土坑（南より）

10号住居

調査地東端付近に位置し、2号・3号・9号住居と重複関係にある。検出面からの掘り込みは35cm程になる。地床炉は北側柱穴間中央に位置し5cm凹む。床面は平坦で堅緻である。

遺物の出土量は少量にすぎず、それも小破片である。器種には壺・甕（図22-1～4）・鉢（高坏）がみられる。石製品に砂岩製砥石（5）が出土している。

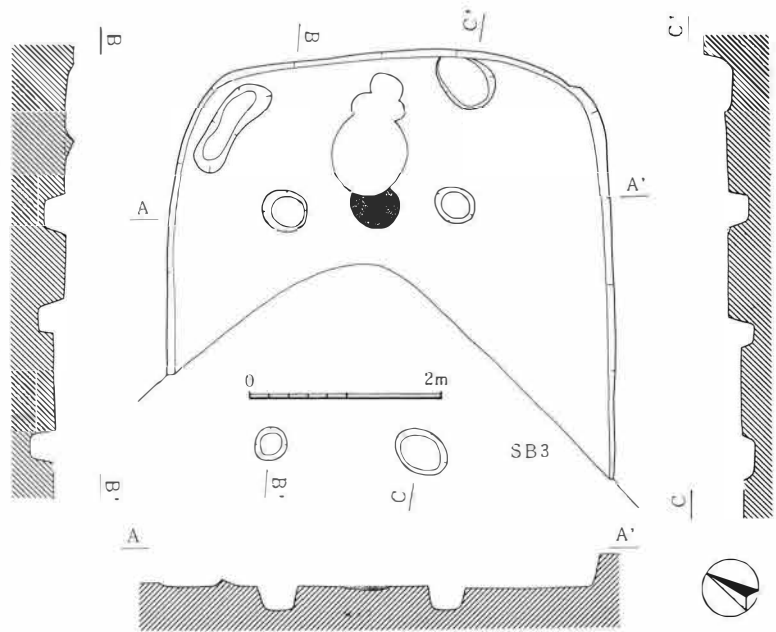


図21 10号住居

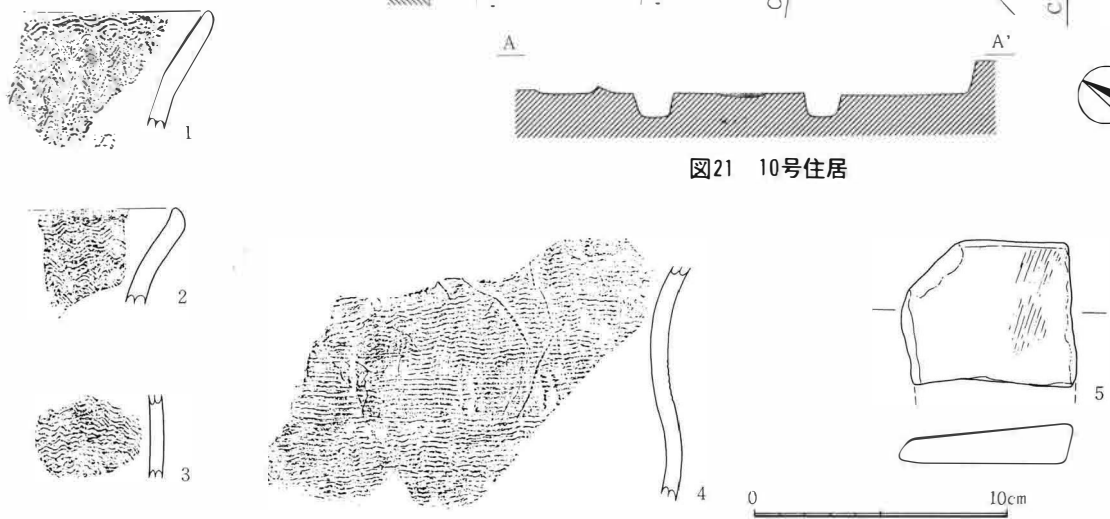


図22 10号住居出土遺物（5 - 1/3）



10号住居（南西より）



10号住居の周辺（東より）

15号住居

検出した柱穴が4個方形配列のものと考えれば、全体の2/3程調査したことになる。調査地の中央よりやや北側に位置し、地床炉は西壁柱穴間中央にあるが、床面は焼土塊化していない。床面は平坦であるが堅緻なものではない。

遺物の出土量はそれほど多くない。器種には壺(図24-4~9)・甕(1・10~19)・高坏(2・3)がある。壺の文様はT字文(5・6)・鋸歯文(5)・へら描平行線文(9)がある。甕は楯描波状文・簾状文を主体とするが、斜行線文のもの(16・17)もある。20は閃緑岩製太型蛤刃石斧である。

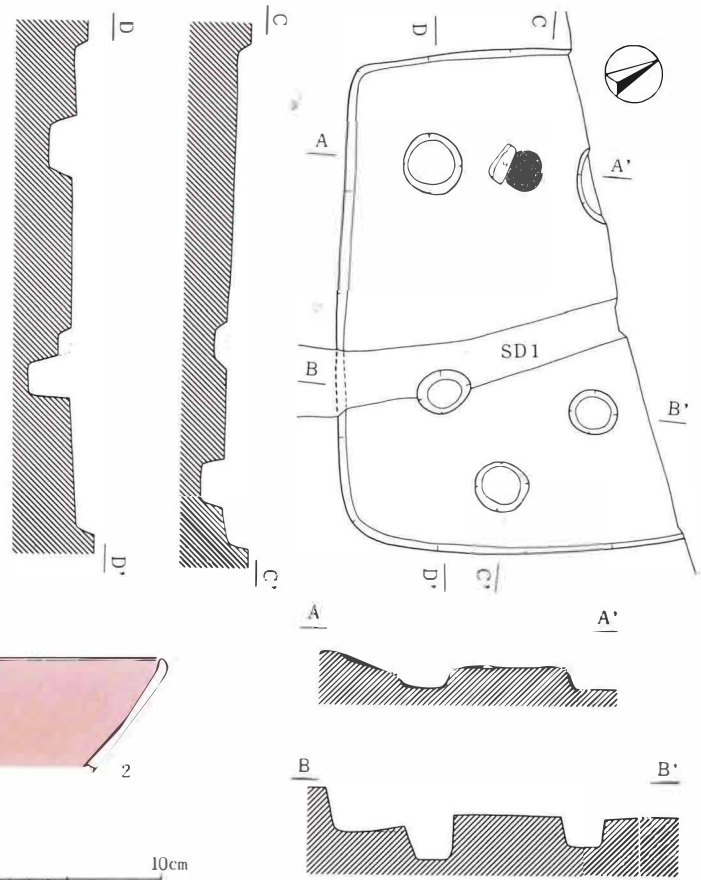


図23 15号住居

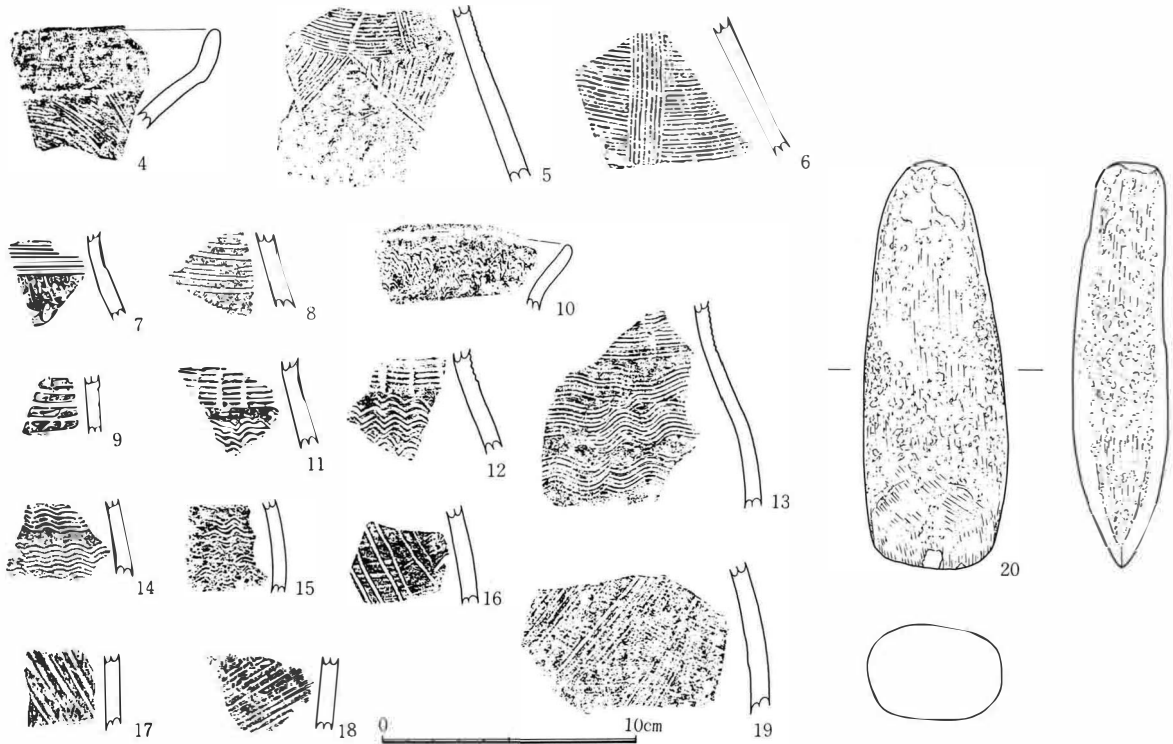
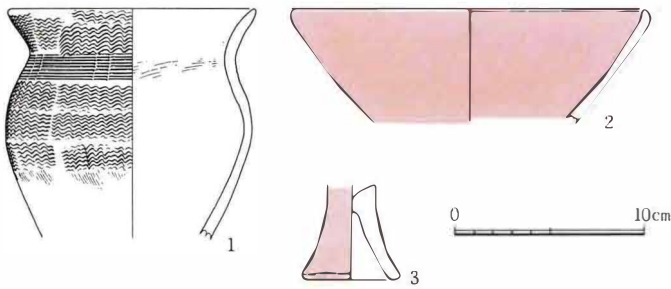
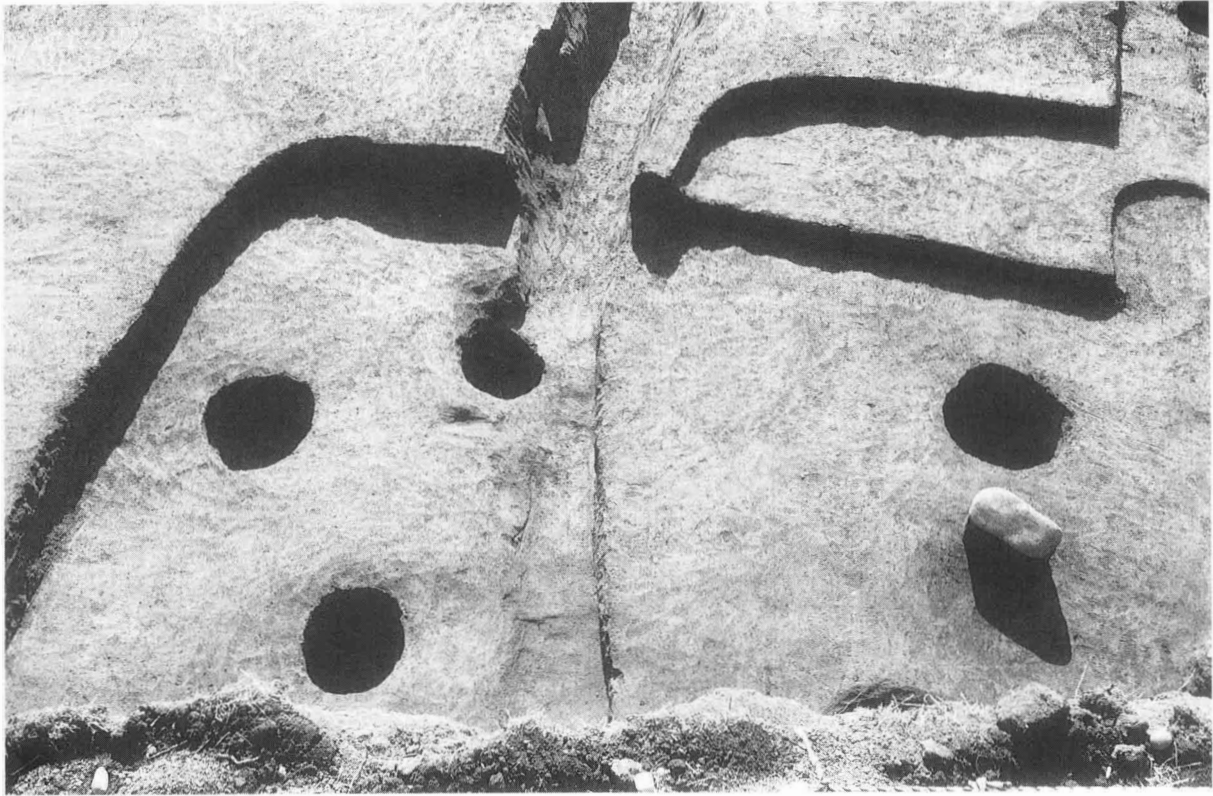


図24 15号住居出土遺物(20-1/2)



15号住居（北より）



15号住居（西より）

22号住居

36号住居、2・3号溝と重複関係にある。これらよりも先行する。床面は平坦であるが軟弱で、柱穴・炉等が確認できなかったことから、住居としての使用に積極的な根拠はない。

遺物の出土量は少ない。器種には壺(図26-1・2)・甕(3~12)がある。1の文様構成は楡描平行線文間をヘラ描斜行線文でうめる。

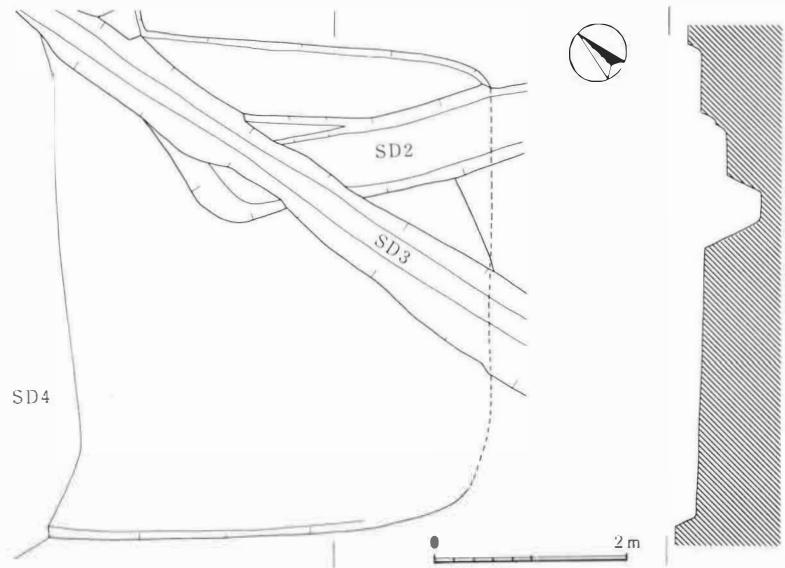


図25 22号住居

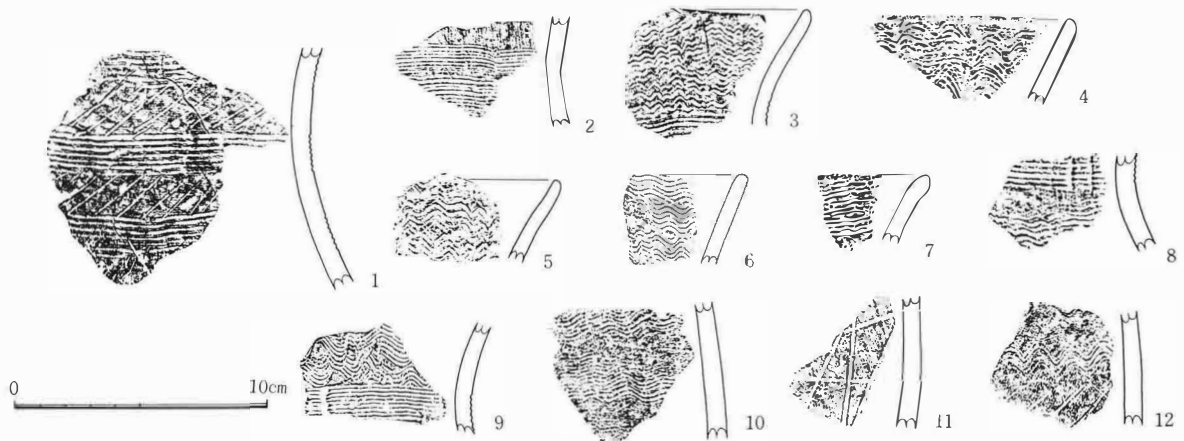
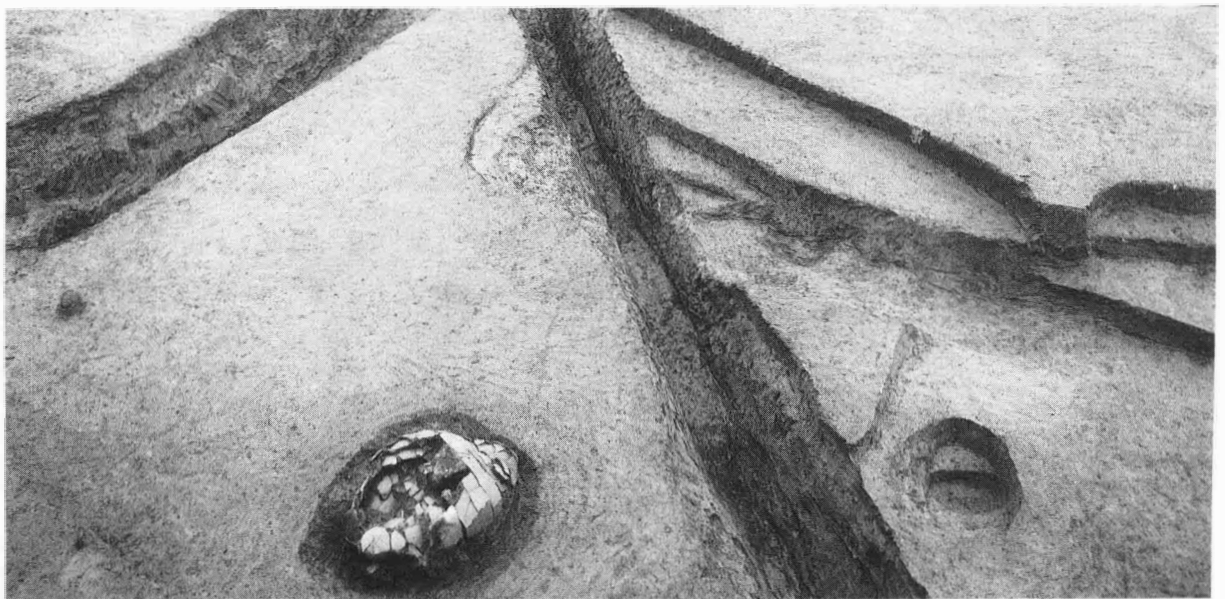


図26 22号住居出土遺物



22号住居 (南より)

23号住居

7・16・18号住居と重複関係にあり、18号より後出である。掘り込みは検出面から32cmを測り、床面は平坦で軟弱である。16号住居壁に焼土がみられ、北壁沿いの支柱穴間の中央付近にあたり、本住居の炉と考えられる。

遺物の出土量は少ない。器種には壺(図28-1~4)・甕(5~13)がある。これらは全て櫛状工具による施文である。

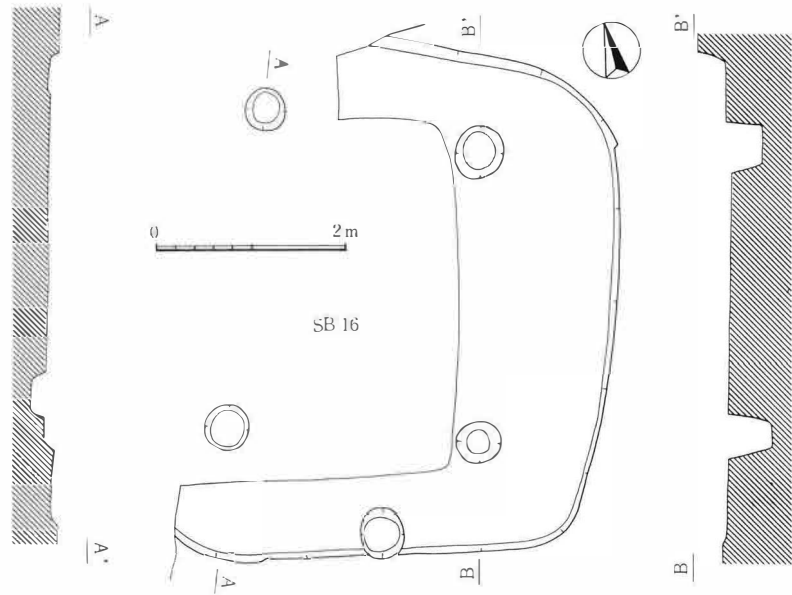


図27 23号住居

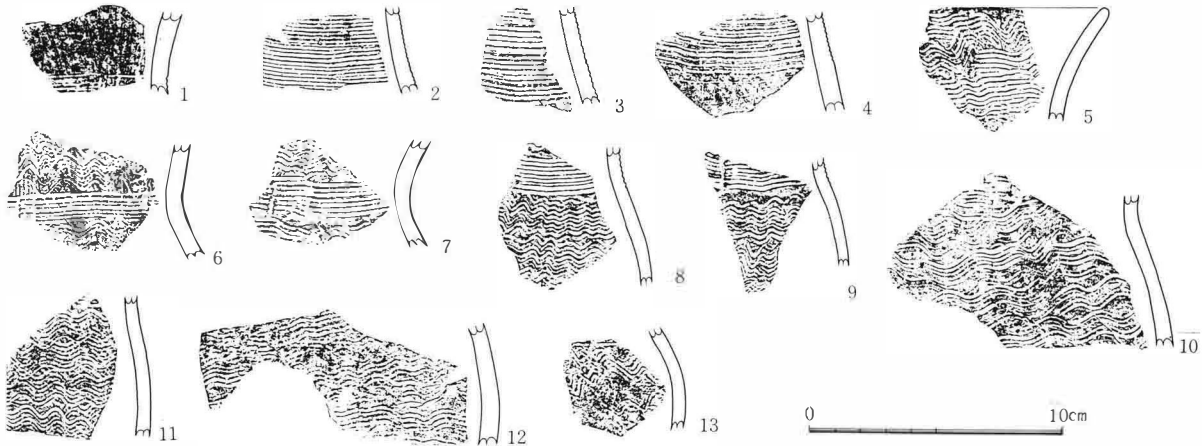
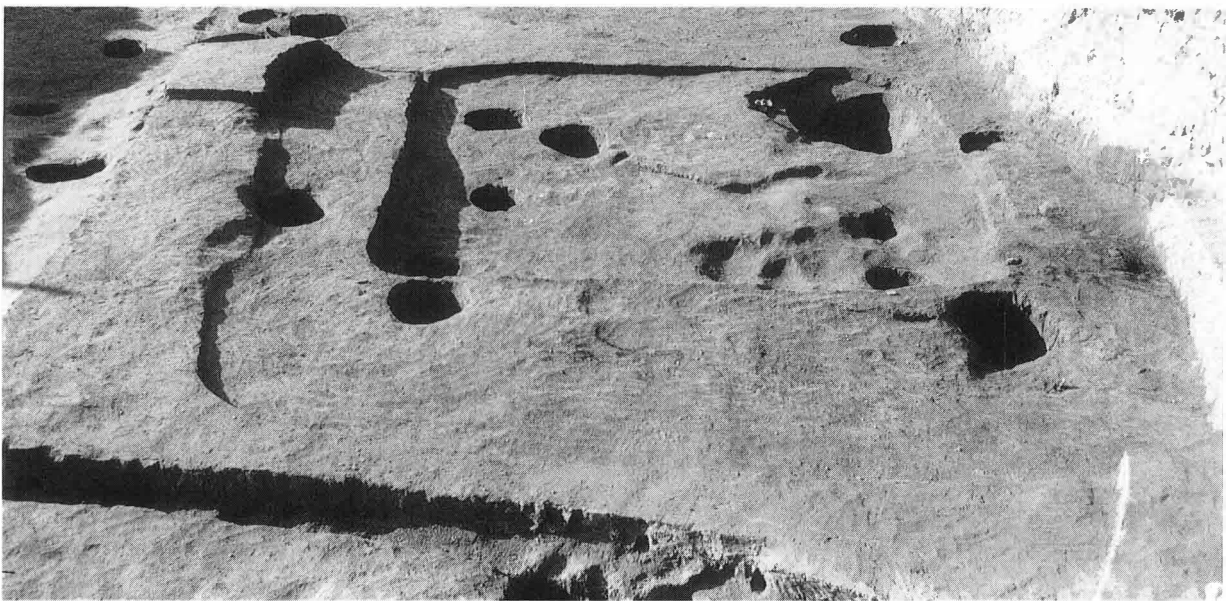


図28 23号住居出土遺物



23号住居 (東より)

24号住居

調査地東側の住居址群の一つで、5号・7号・8号・17号住居と重複関係にあり、最も古い。主柱穴は4個長方形配列で、南・北壁際中央に棟持柱の存在を示す柱穴がある。この柱穴から住居形態は隅丸長方形を推定する。炉は北壁柱穴間にあったものと予想するが焼土塊等の痕跡はなかった。床面は堅緻であるが、南側柱穴以南は傾斜し低くなる。検出面からの掘り込みは40cm程を測る。

遺物の出土量は比較的多い。器種には壺(図30-1・2)・台付甕(6)・甕(7~26)・高坏(3・5)・浅鉢(4)がある。1は頸部に櫛描平行線文がめぐらされ、体部外面及び口縁部内面には赤色塗彩が施される。体部内面にはハケ整形痕が残る。2は頸部から体部上半まで幅広のT字文が施文され、その上下は赤色塗彩される。赤色塗彩は4・5の坏部内外面・脚部外面に認められる。3にはハケ整形痕が残る。甕の文様構成は、口縁部・体部下半まで櫛描波状文でうめ、頸部は簾状文がめぐるものを主体とする。23~25は体部中位から下半にかけての破片で、斜行するハケ整形後に、これよりも太い工具で、斜行条線文をほどこす。24はこれらが交差し羽状文を形成する。27は覆土中から出土した鉄製品でノミと推定する。基部には木質部が残存し、柄の存在を示す。複合関係にある17号住居からも近似する鉄製品の出土をみている。鉄質良好で類似しており、本例とともに弥生時代の所産となる可能性も指摘される。

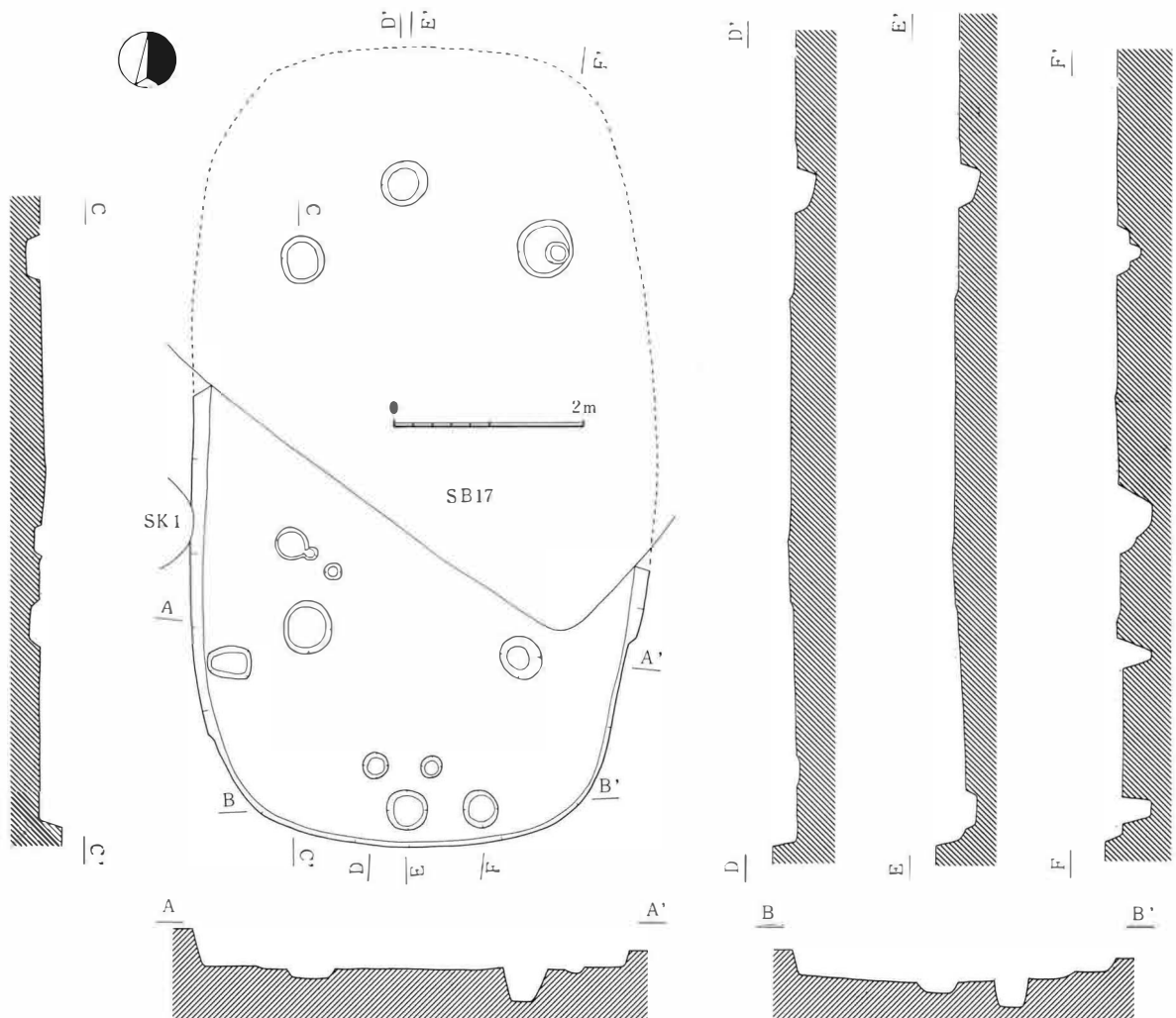


図29 24号住居



24号住居（西より）



24号住居（東より）

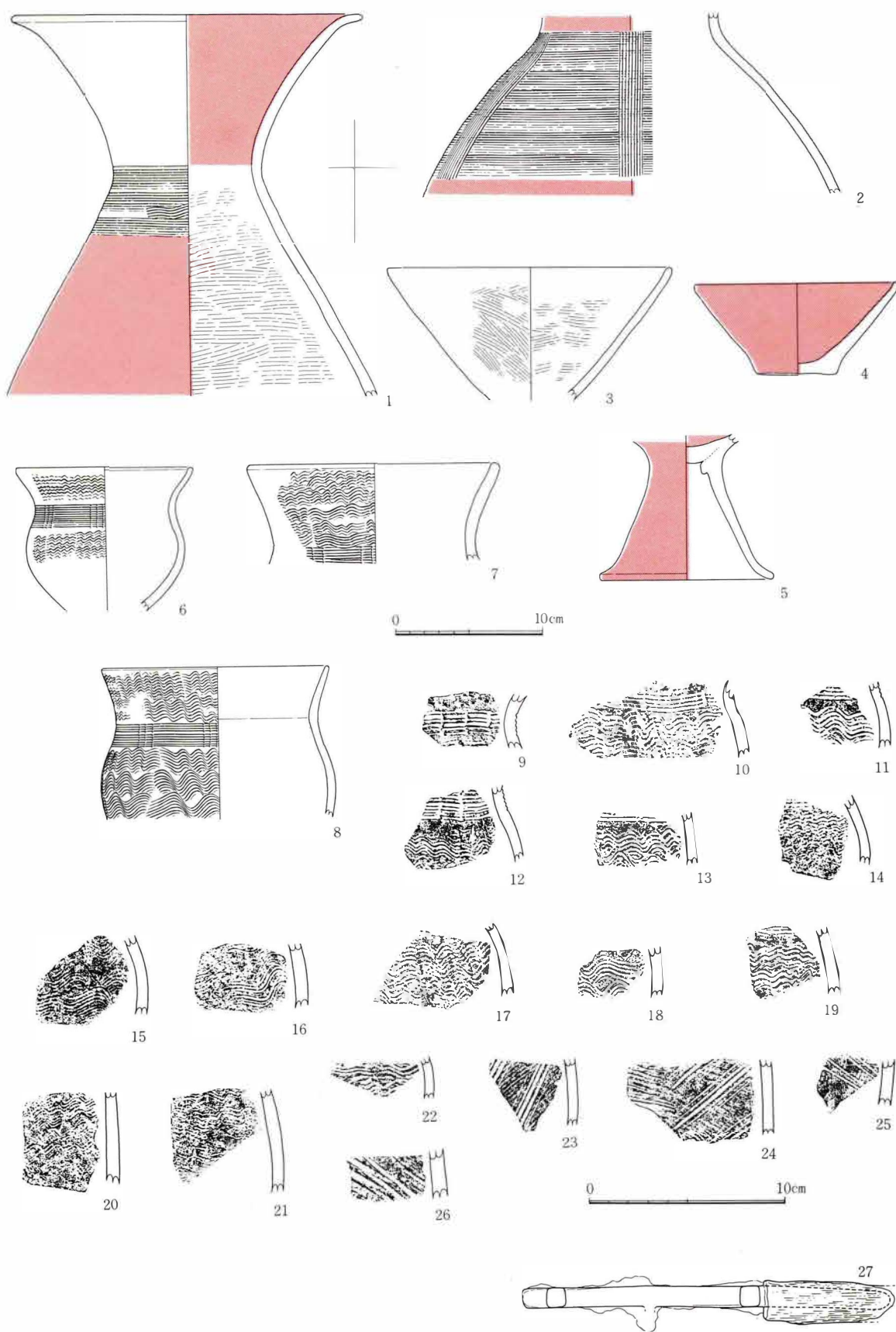


图30 24号住居出土遗物 (27- $\frac{1}{3}$)

30号住居

11・12・31-イ号住居と重複関係にあり、これらよりも先行する。調査では北側半分ほど検出したにすぎない。掘り込みは32cmを測る。支柱穴間に枕石を設置した最大幅64cm・深さ6cm程の地床炉がある。

遺物の出土量が多い。器種には壺（図32-1～5、図34-1～12）・甕（図33-1～3、図34-13～45）・台付（甕）（図32-11）・高坏（7～10）・片口鉢（6）がある。1・3・4・7～10には赤色塗彩が施され、5・8にはへら描鋸歯文がめぐらされる。甕の文様は楯描波状文・簾状文が主体であるが、43～45は斜行条線文により羽状

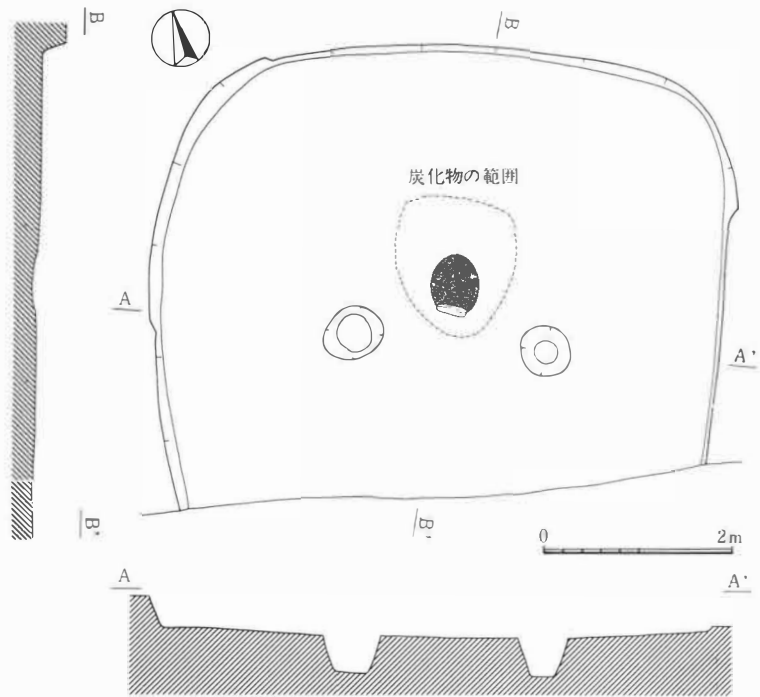


図31 30号住居

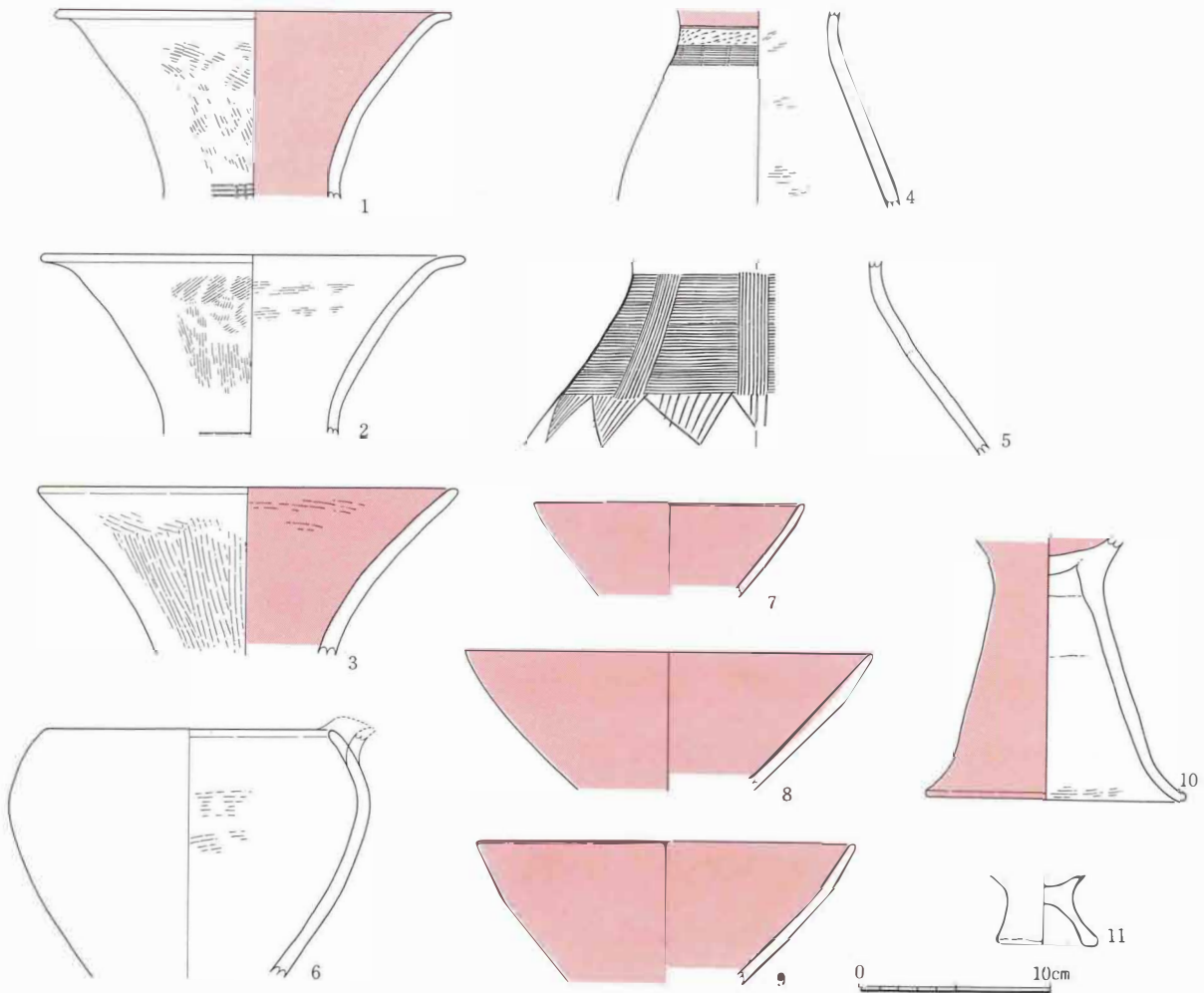


図32 30号住居出土遺物①



30号住居（西より）



30号住居の炉

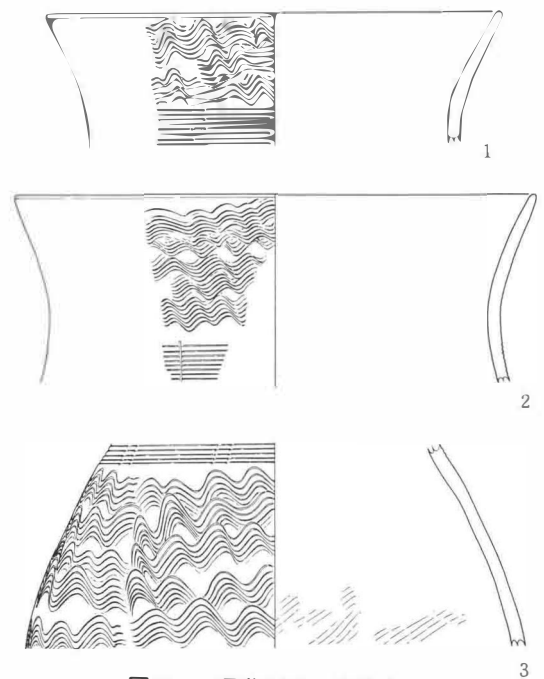


図33 30号住居出土遺物②

文を形成する。土器のほかにも3点の石製品が出土した。頁岩製磨製石包丁(46)・刻みをもつ軽石(47)・安山岩製凹石(48)である。凹石両端は敲打器としても使用している。

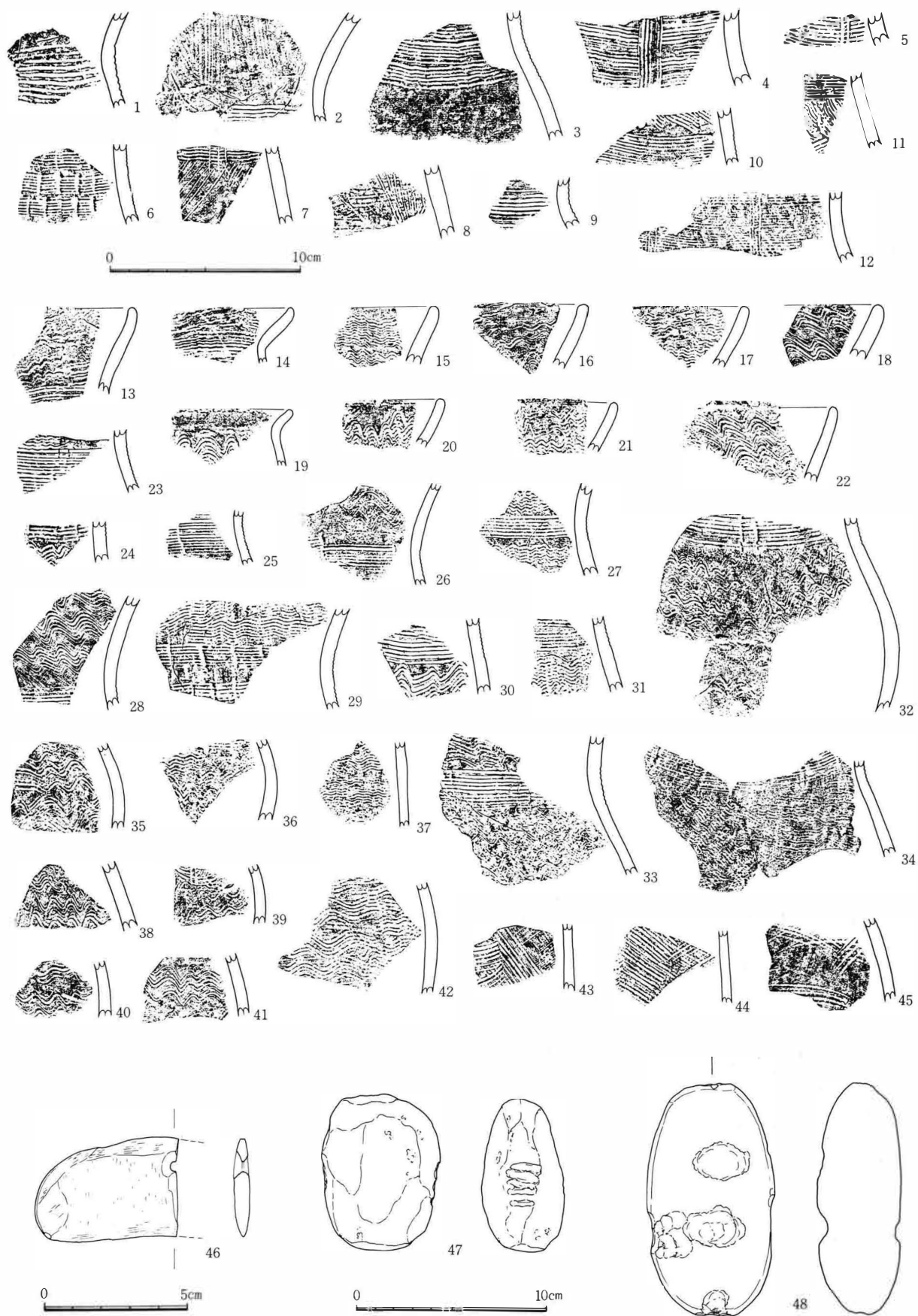


图34 30号住居出土遗物③ (46- $\frac{1}{2}$ 、47·48- $\frac{1}{3}$)

31-I号住居

12・13・26・30号住居と重複関係にあり、30号より新しく他のものより古い。調査では31-I号号と同一の住居と考えていたが、13号住居の壁の観察から床面が2cmの段差を有していたこと、貼床の色調が異なる点から2軒の住居として分離した。検出面からの掘り込みは15cm内外で床面は平坦である。

遺物は31-I号号のものが混入し、比較的多く出土している。器種には壺（図36-1～3、図37-1）・甕（図36-4、図37-2～10）がある。

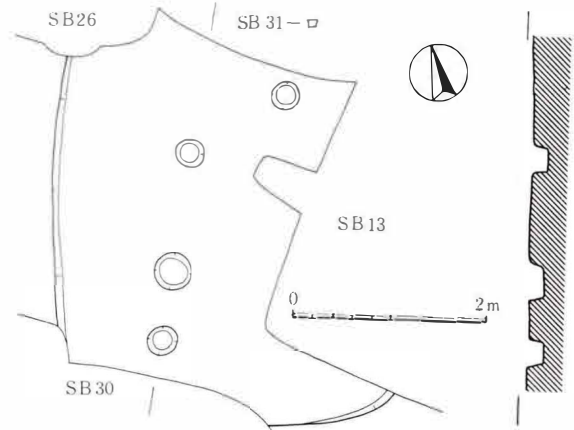


図35 31-I号住居

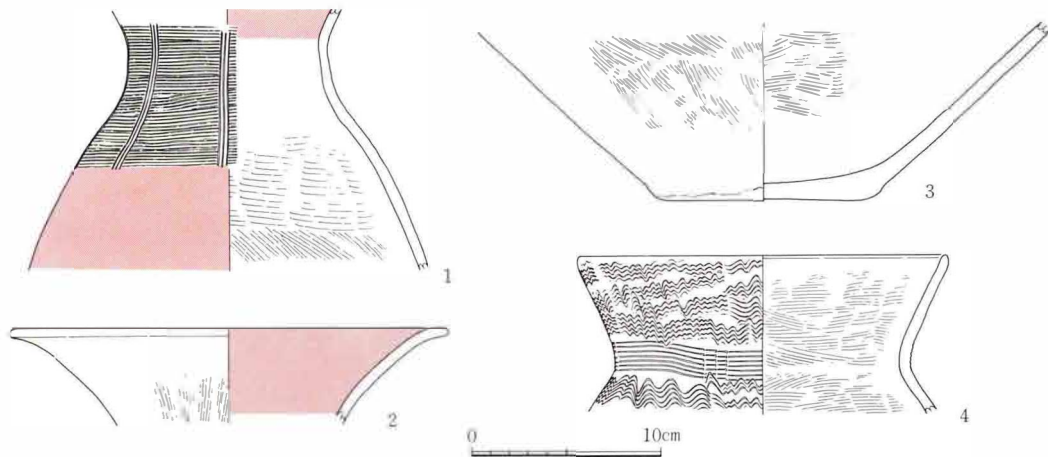
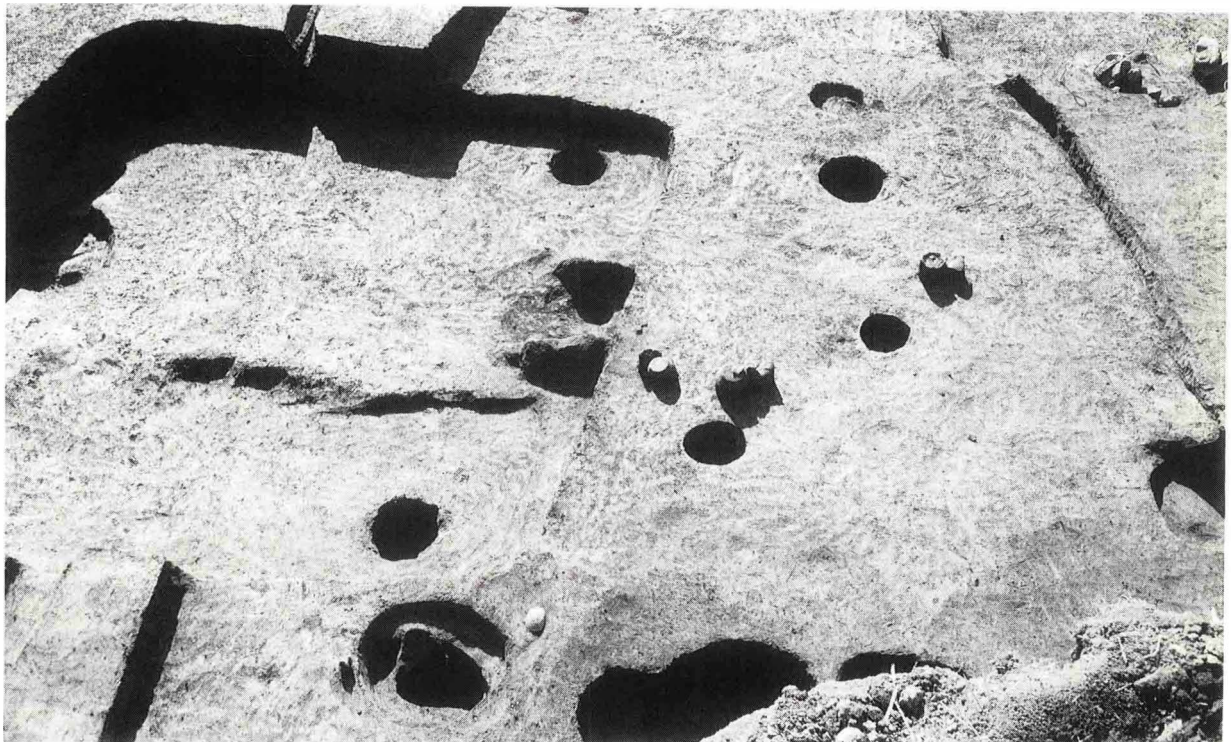


図36 31-I号住居出土遺物①



31号住居（北より）

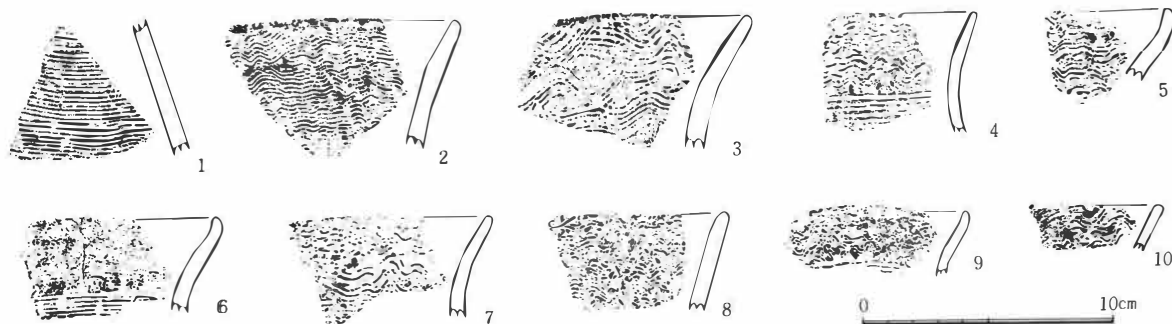


図37 31-I号住居出土遺物②

31-口号住居

13・26・31-I号住居と重複関係にある。31-I号の床面より2cm程高い。支柱穴が2個確認され、4個方形配列であろう。

遺物は全て床面直上からのものである。器種には壺(図39-3~5)・甕(7~27)・高坏(1・2)がある。6の頸部文様はヘラ描による。

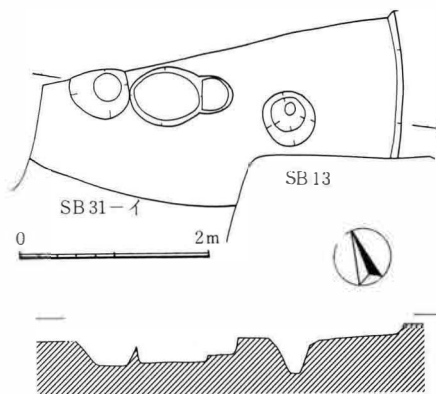
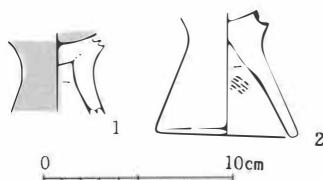


図38 31-口号住居

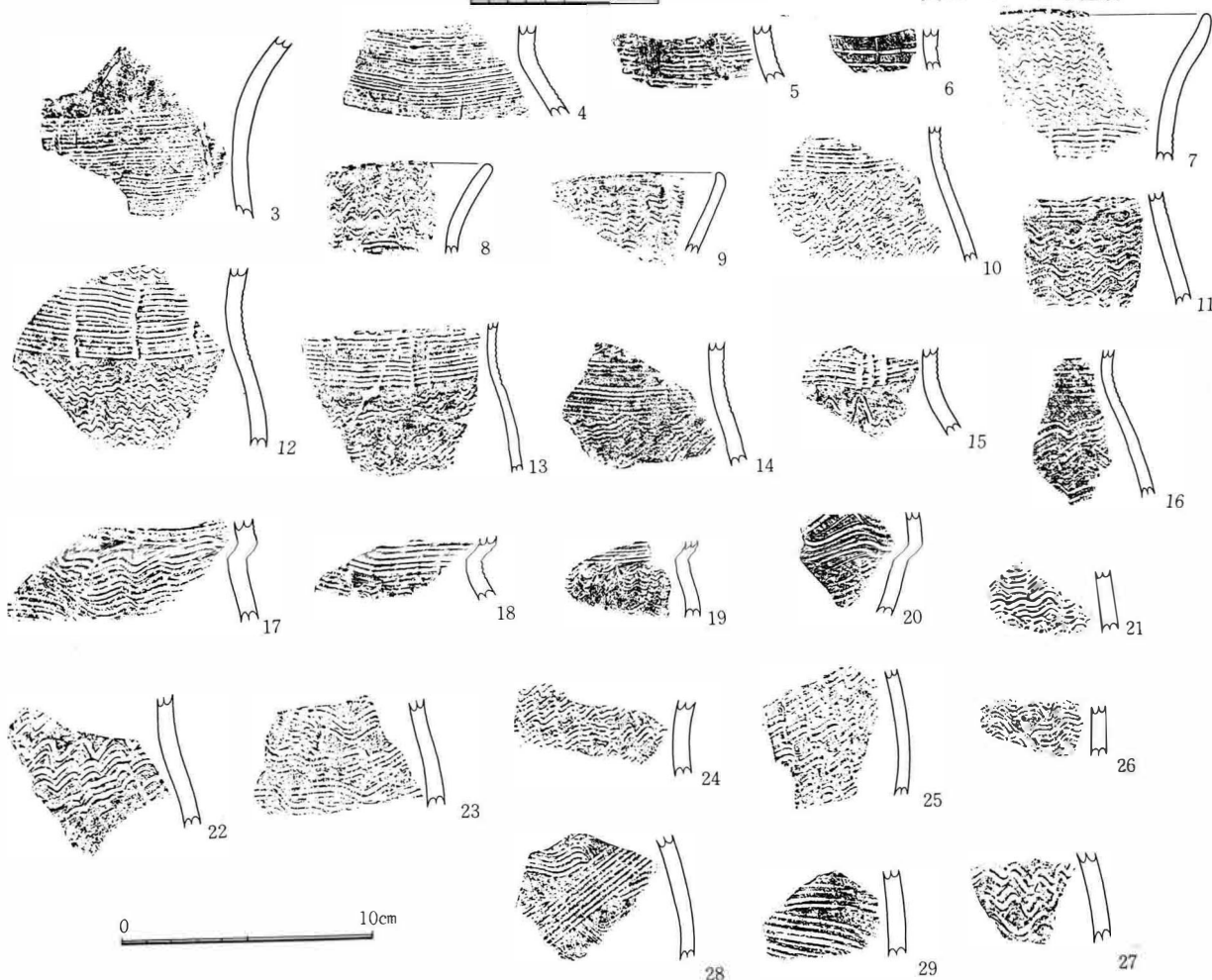


図39 31-口号住居出土遺物

41号住居

調査地中央付近に位置し、45号住居、5・7号溝と重複関係にあり、最も先行する遺構である。掘り込みは東壁で32cmを測り、床面は堅緻でいくぶん西傾する。支柱穴は不整形な4個方形配列になる。東壁間中央の内寄りに土器埋設炉があり周辺部に炭化物の散在が著しかった。床面は中央付近がやや凹む堅緻なものである。西壁中央付近に幅36cm・深さ10cm周溝状の掘り込みがみられた。

遺物の出土量は多く、それもほとんどが床面直上付近からの検出である。器種には壺（図41-1～4、図42-1～4）・台付甕（14・17・20）・甕（13・15・16・18・19・、図42-5～33）・高坏（図41-5～8）・片口鉢（9）・広口壺（10）・甑（11）・蓋（12）がある。4は埋設炉に使用されていた。壺の頸部から肩部にかけての文様は、横位の櫛描平行線文とこれを縦に区画する平行線文によるT字状文を基本とするが、縦の平行線文がヘラ描によるもの（図41-1は3本、2は1本、3は2本、図42-3は1本）もある。3は下段に間隔の細かい1帯の簾状文を付加する。甕の文様は櫛描波状文と簾状文で構成される。13は客体的な土器で、口縁部が直立し、有段をなし、体部が直線的で底部外面が凹むという特色がある。口縁部に櫛描列点文、体部上半に刺突列点文と左回りの波状文をめぐらす。波及地を近江地方に求める。

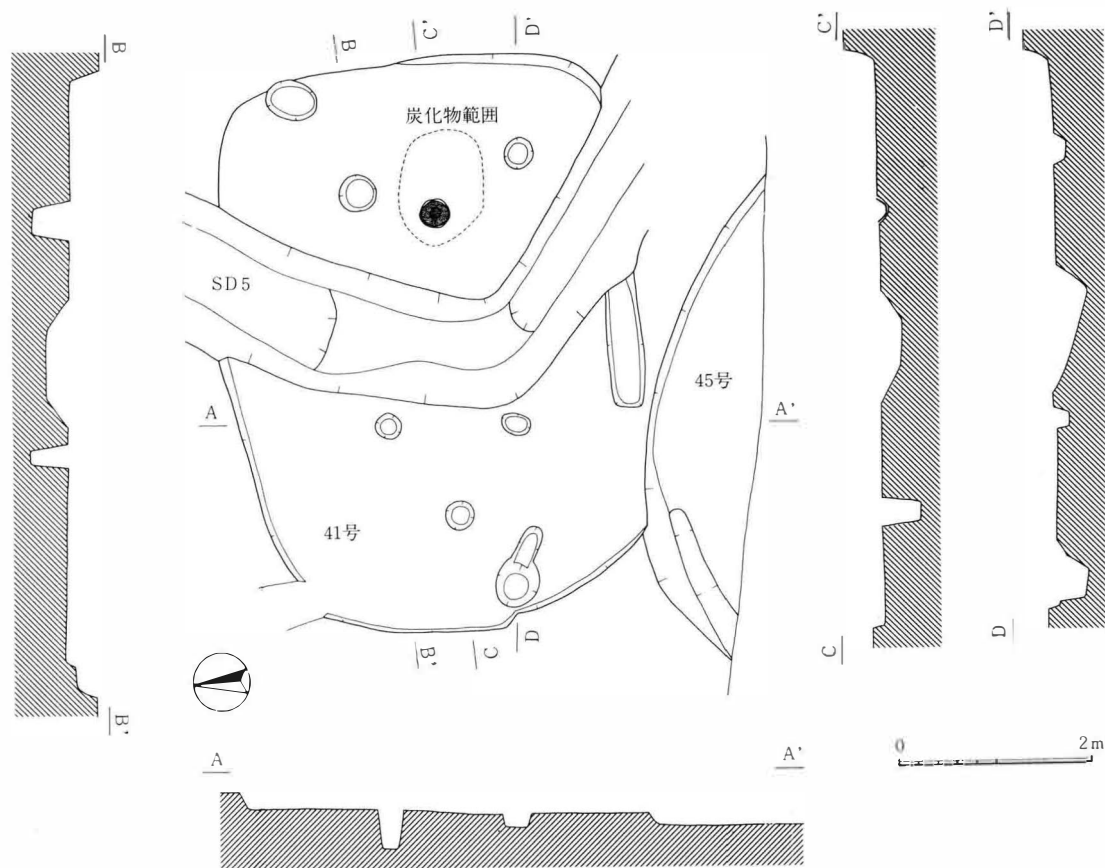


図40 41号住居・45号住居

45号住居

41号住居と重複関係にあり、これよりも先行する住居である。調査では北西隅付近を検出したにすぎず、規模や柱穴・炉の位置等是不明である。西壁下を周溝がめぐるといふようである。床面は平坦で堅緻である。

遺物の出土量は少ない、器種には壺（図43-1・9～15）・台付甕（7・8）・甕（6・16～28、図44-1～9）・高坏（2～4）・蓋（5）・浅鉢がある。1～4には赤色塗彩が施される。1は体部下半に有段部を形成しなく丸味を有する。文様はT字状文で垂下する平行線文下に円形添付文が4個付される。2は口縁部と体部の

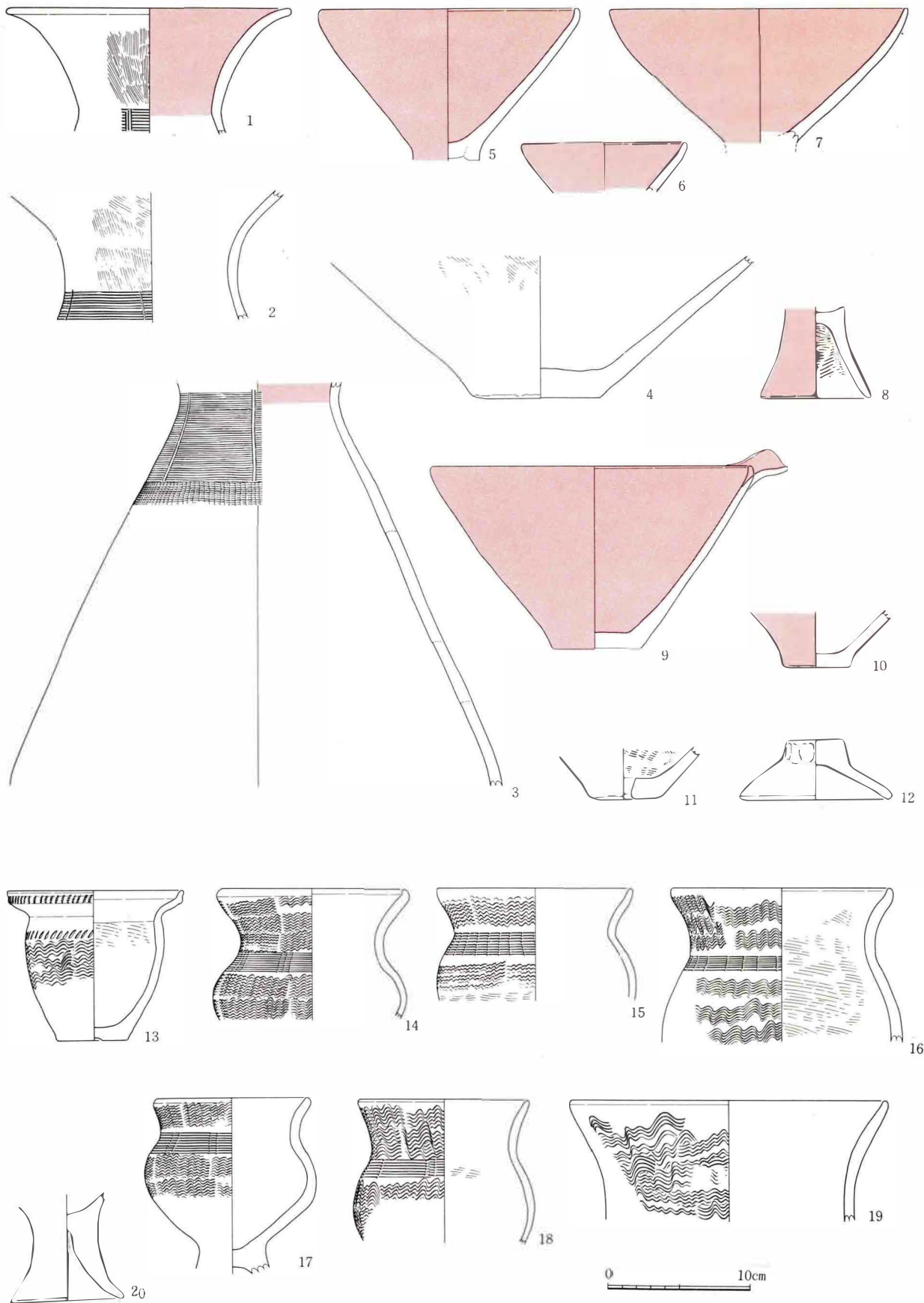
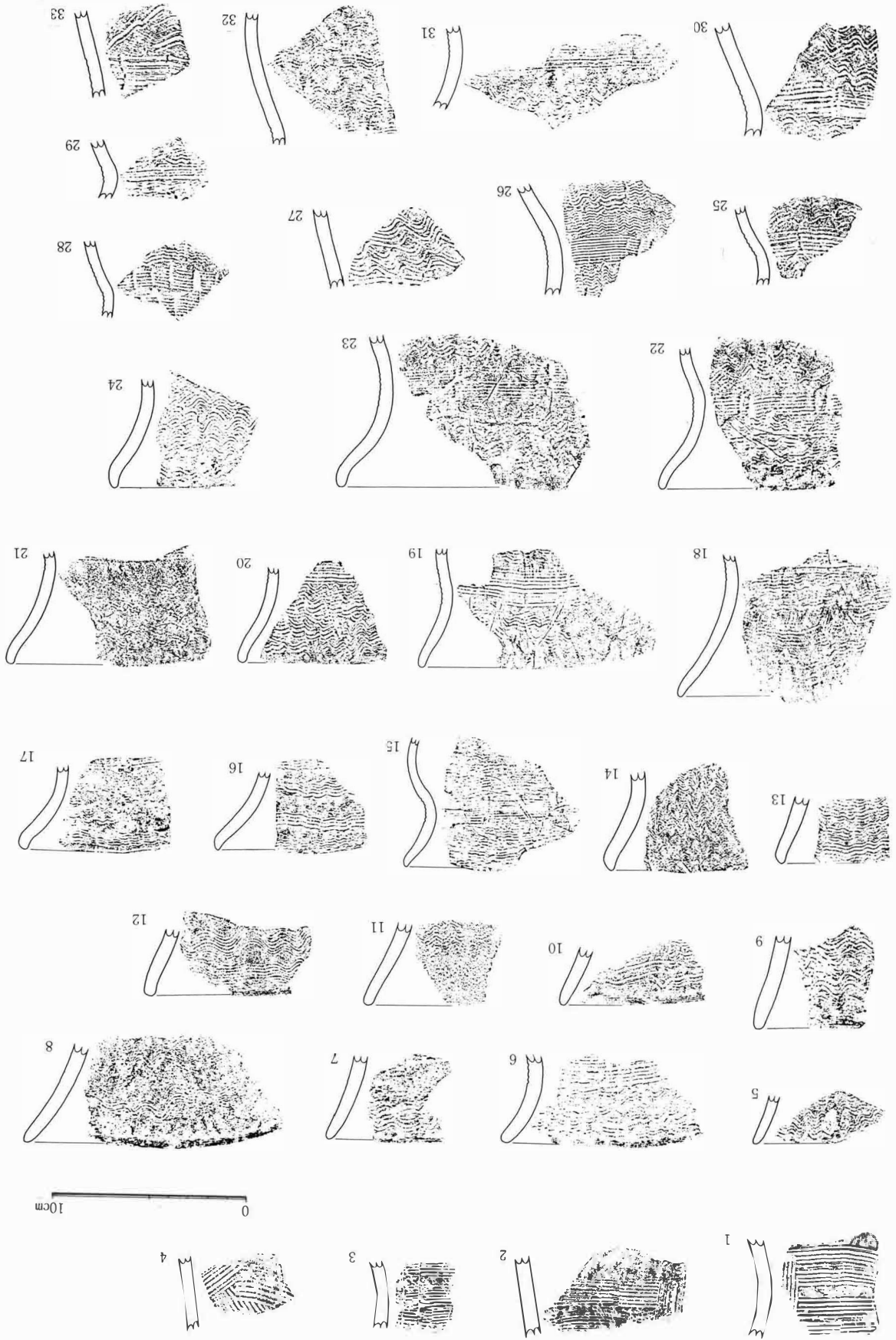


图41 41号住居出土遺物①

图42 41号住居出土遺物②





41号住居・45号住居（西より）



41号住居・45号住居（北より）

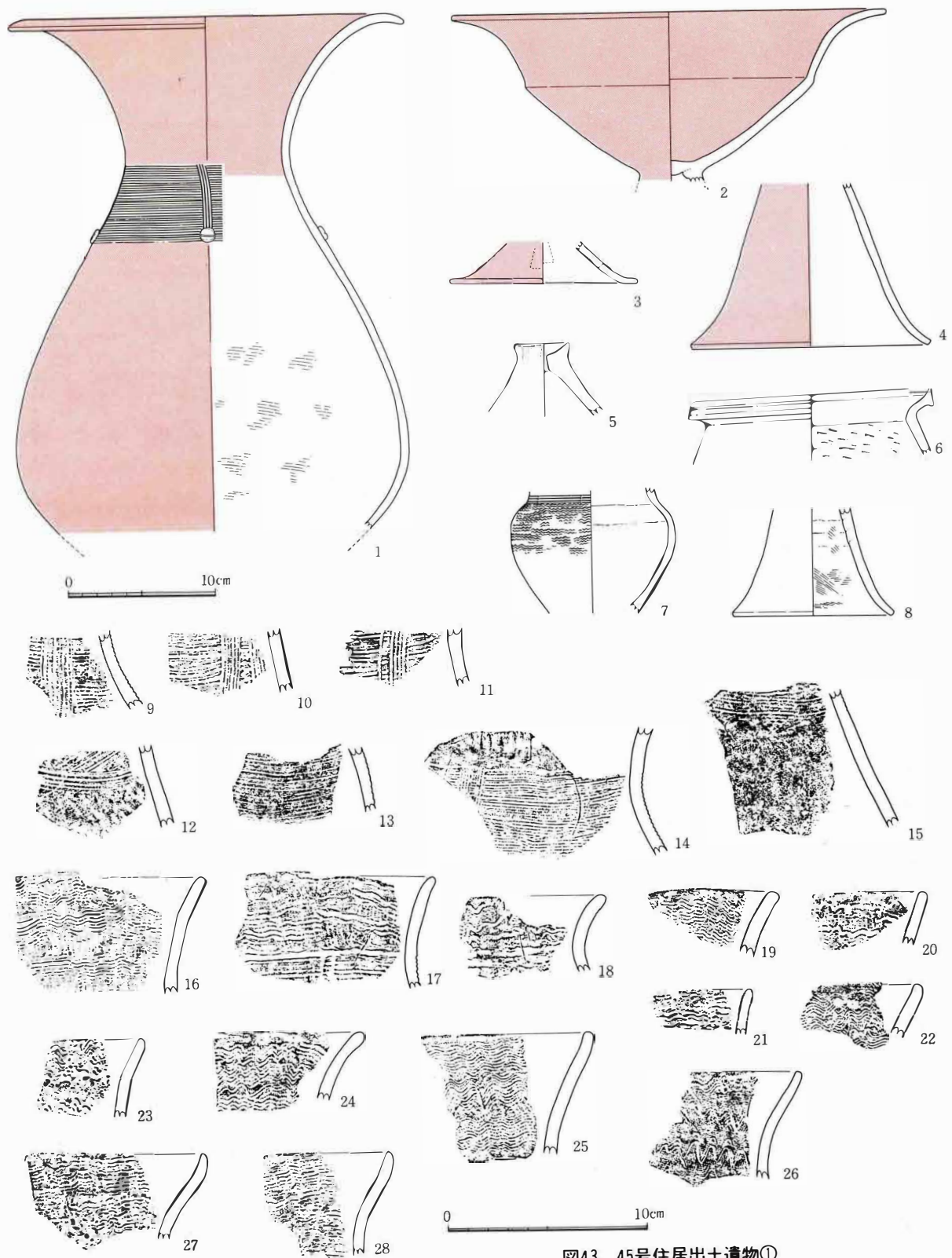


図43 45号住居出土遺物①

境に稜線を形成する。3には三角形透孔が4個穿たれる。5には小円孔がある。5は客体のもので、頸部で強く屈開し、口縁部が直立する。口縁外面には幅広な凹線文状になり、体部内面はヘラケズリで調整される。北陸地方に影響地を求める。他の甕の文様は、口縁部及び体部下半まで波状文を、頸部には簾状文をめぐるものを基本とするが、交叉する斜行条線文による羽状文のもの（図44-9）もある。

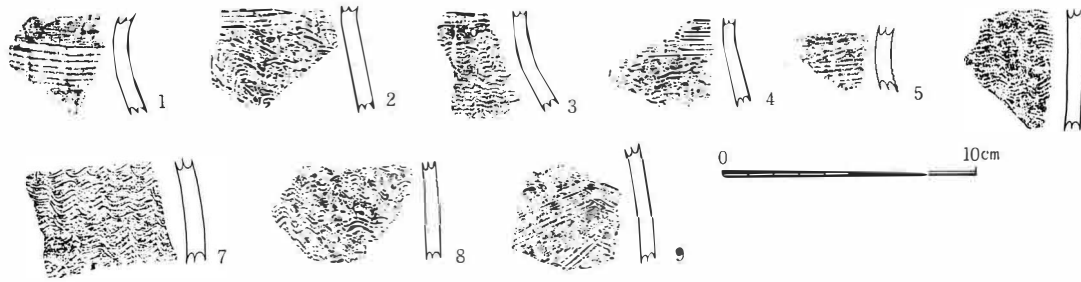


図44 45号住居出土遺物②

43号住居

南北軸が2.84mを測る小形住居である。柱穴は南壁下中央のものと、北壁沿いの周溝状掘り込みを利用すれば2本柱の小屋組を想定できる。床面は平坦で、地床炉は北壁側中央にあり、5 cm程凹む。

遺物の出土量は少ない。器種には壺(図45-1)・甕(2)がある。

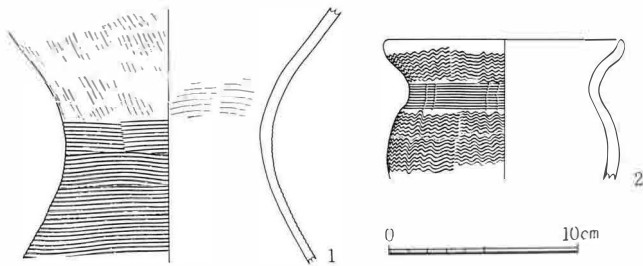


図45 43号住居出土遺物

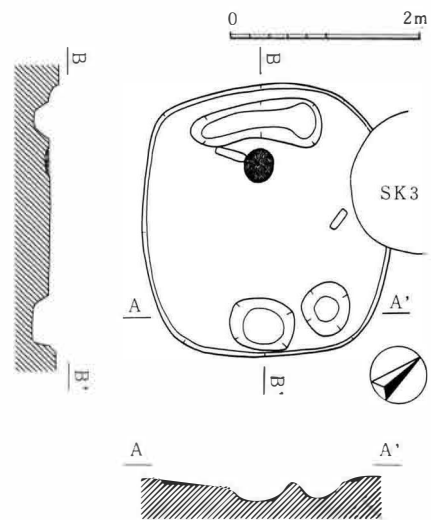


図46 43号住居



43号住居 (南東より)

44-口号住居

44-イ号住居に内包されるような形で重複関係にある。調査では北壁側の一部を検出したにすぎない。形態を隅丸長方形と推定する。柱穴は2個確認され、東壁沿い柱穴より内側に枕石を1個配した土器埋設炉がある。床面はいくぶん凹凸があるが堅緻である。

遺物の出土量は少ない。器種には壺(図48-1・3・4)・台付甕(2)・甕(5~11)・高坏がある。1はが体として利用されていたもので、4帯の平行線文に波状文が附加される文様構成になる。3はT字状文である。5は口縁部が内屈し、特徴的な土器である。文様構成は波状文と簾状文を基本としている。

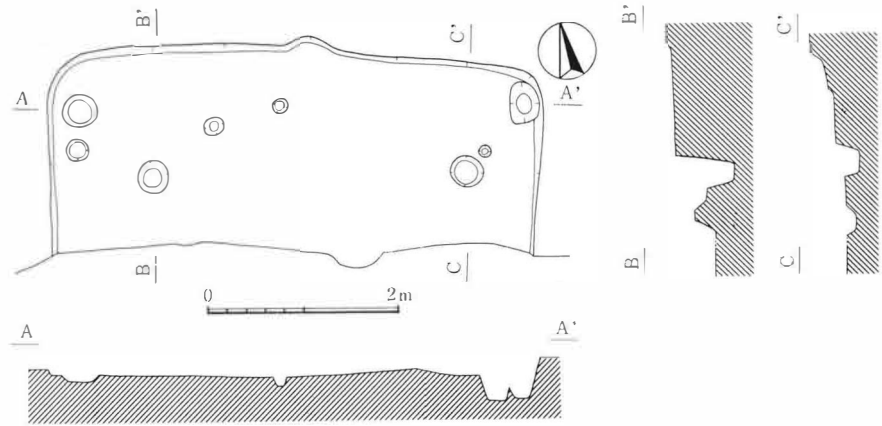


図47 44-口号住居



44-口号住居の炉



44-口号住居(北より)

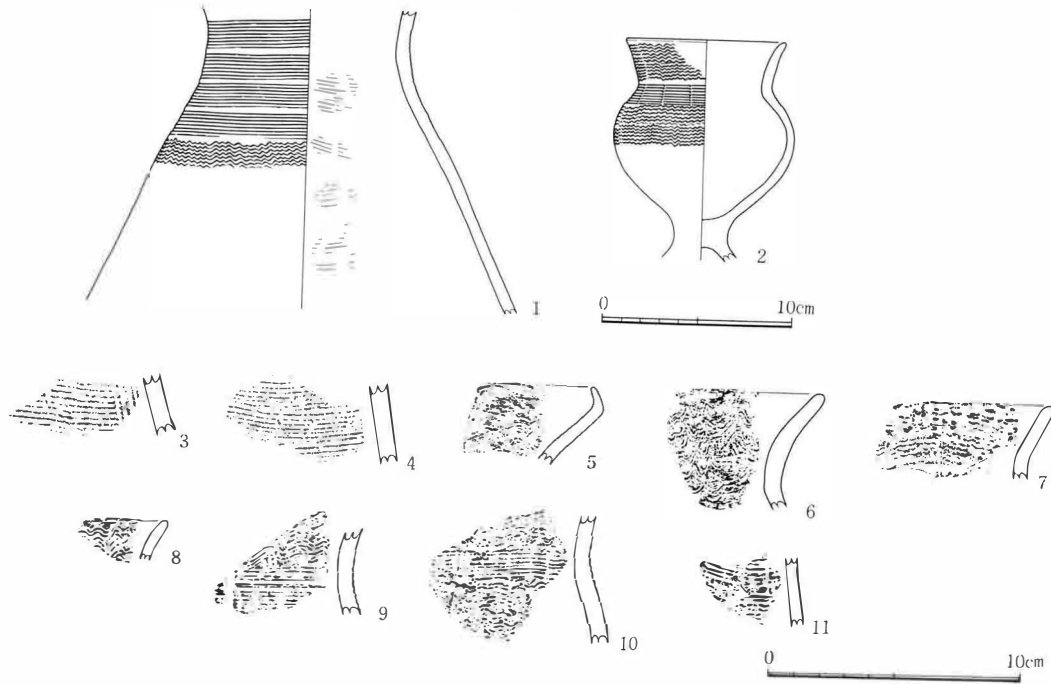


図48 44号住居出土遺物

47号住居

調査地の中央付近の弥生時代遺構群のなかの一つで、48号住居を切り込み、8号溝により切られる。掘り込みは浅く8cm前後を測り、床面の中央付近に向けいくぶん凹む。床面は堅緻である。支柱穴は4個長方形配列で、北壁沿い支柱穴間中央より内方に土器埋設炉がある。

遺物の出土量は割合に多く、それも床面直上付近からの出土である。器種には壺(図50-1~3・9)・広口壺(4)・甕(8、図51-1~4)・高坏(図50-5・6)・浅鉢(7)がある。9は炉として利用されていた。1・3~7には赤色塗彩が施される。壺のうち1・2の体部最大径が

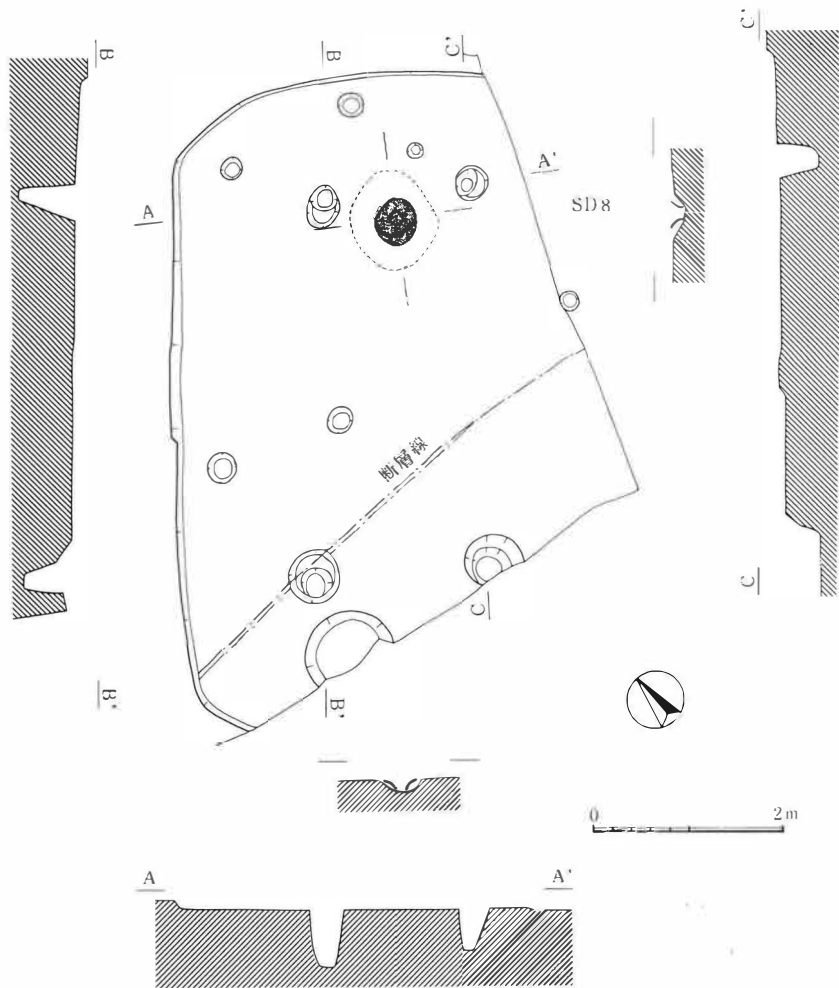


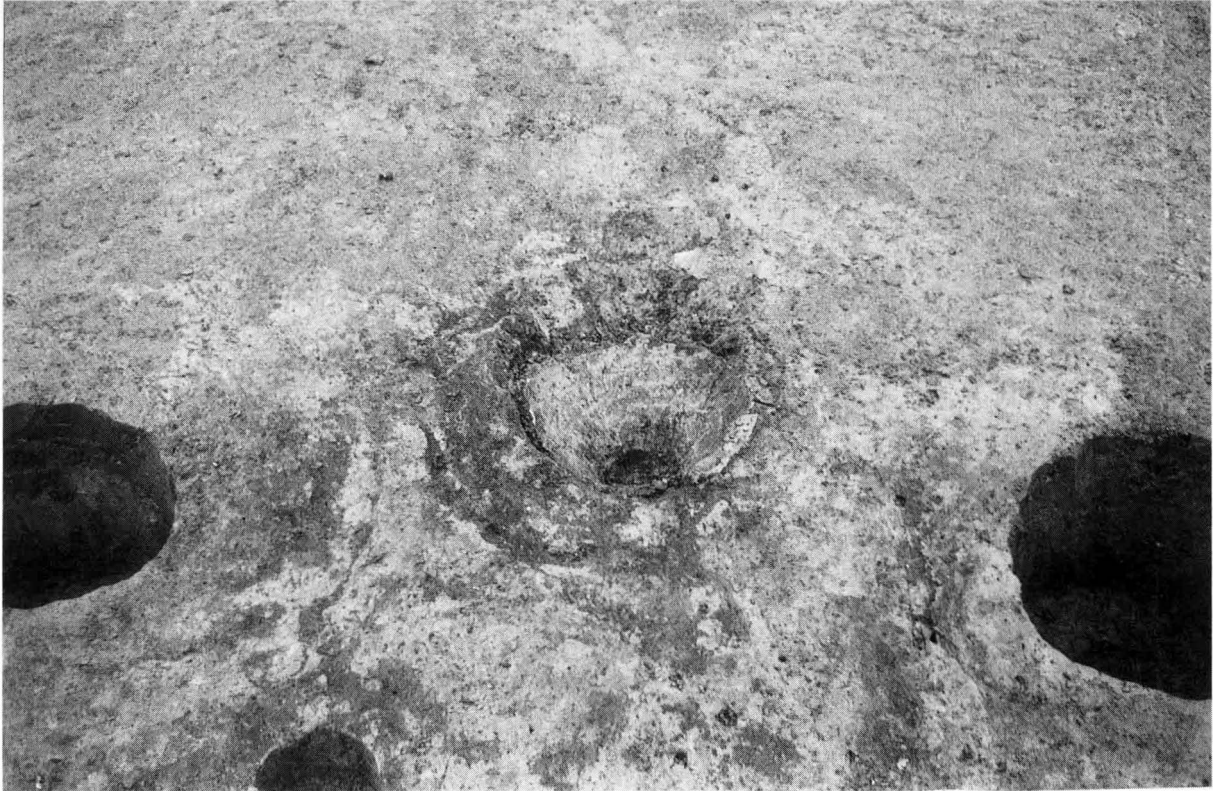
図49 47号住居



47号住居（北東より）



47号住居の周辺（東より）



47号住居の炉



47号住居の遺物出土状態

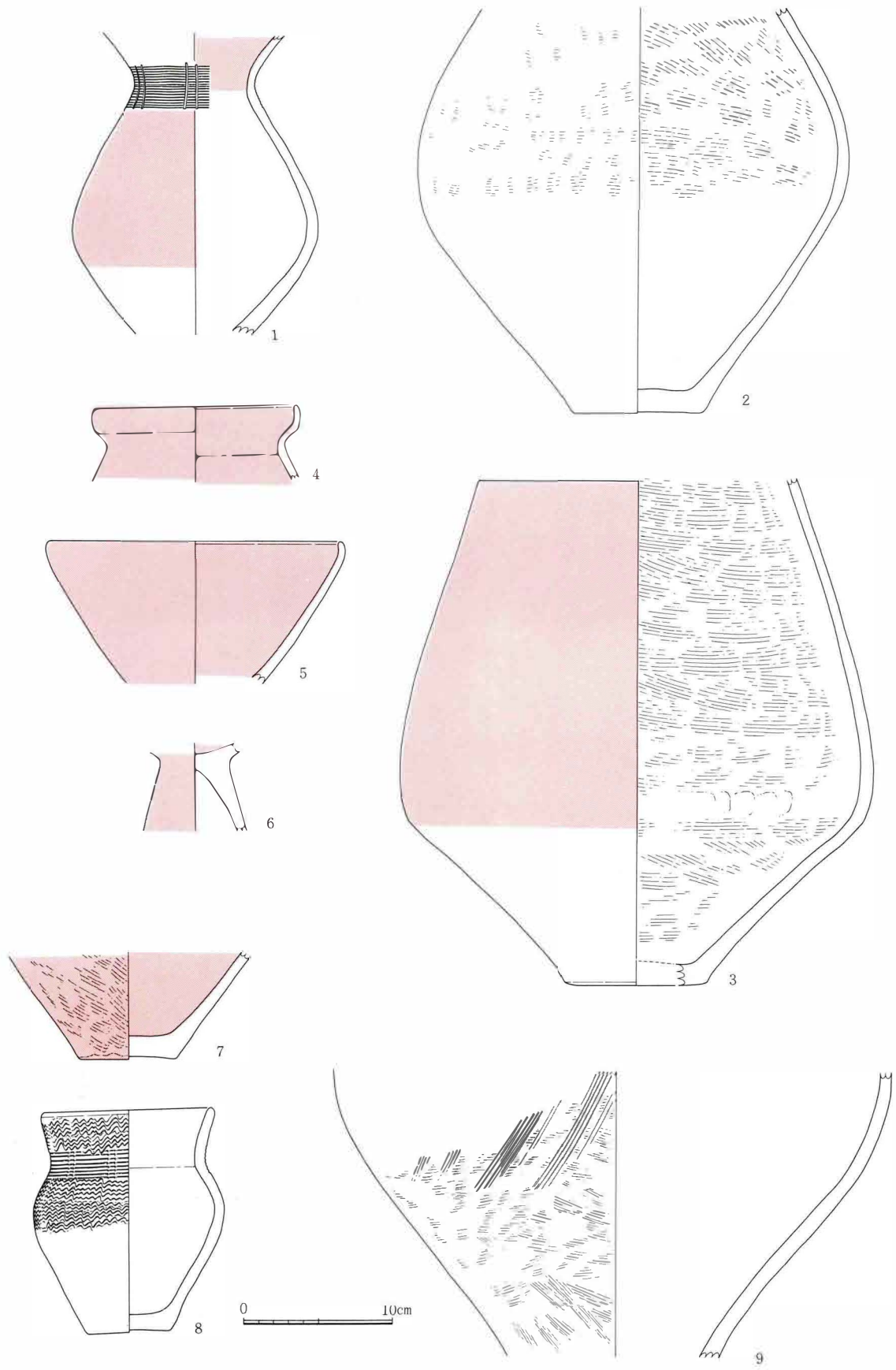


图50 47号住居出土遺物①

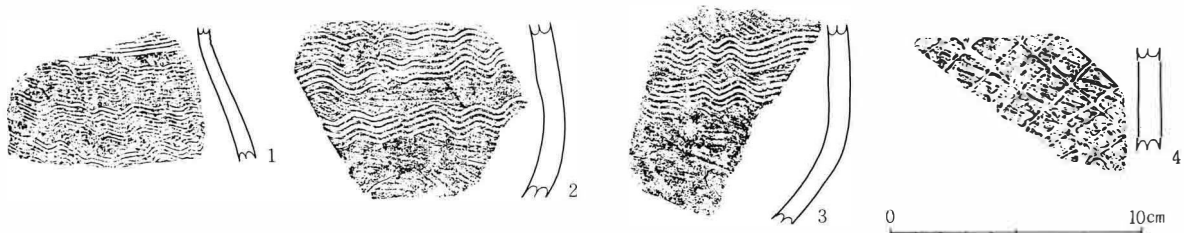
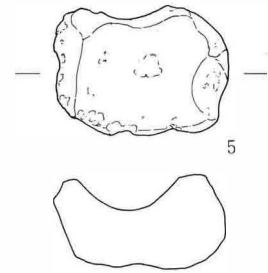


図51 47号住居出土遺物② (5-1)

中位付近にあり、丸味をもって底部に至るのにたいし、3・9は体部最大径が下半にあり、屈曲して底部に接合する。1の頸部文様は櫛描平行線文帯を垂下する2本のヘラ描平行線文により区画される。9の体部には数本の斜行条線文が施される。2・3・9にはハケ調整痕が残る。4は口縁部が内弯しながら立ち上がる甕形を呈する。5は口縁部が短く立ち上がり浅鉢形を呈する。高坏の坏部の口縁部と体部の接点が稜をなすものはない。甕には大形のものと小形のものがあり、口縁部・体部中位まで波状文が、頸部には2段止簾状文をめぐる(8)。甕の文様構成はこれを基本とする。図51-4はヘラ描斜行線文を交叉することにより格子状文を形成している。土器のほか、軽石製凹石(5)、鹿と推定される獣骨が出土している。凹石は石皿状を呈し摩耗している。



50号住居

調査地中央付近の弥生時代遺構群の一つで、住居としては最も西に位置する。49号住居・溝状遺構(SZ1)に隣接し、北壁の西隅部を除き完掘した。形態は北・南壁に丸みがある隅丸長方形を呈する。支柱穴は4個方形配列で、北壁沿い柱穴間より北に張出して枕石を有する地床炉がある。炉は直径約40cmの円形をなし、5cm程凹む。長軸上の南・北壁中央下に柱穴があり、棟持柱の痕跡であろう。掘り込みは8cmと浅い。床面は平坦であるが若干南・東傾し、堅緻である。

遺物の出土量は少ないが、全ての床直上付近からの出土である。器種には壺(図53-4~6)・甕(2・3・7~9)・高坏(1)がある。4~6ともに頸部付近の破片である。5・6は平行線文が施されるだけであるが、4は口縁部に向け、交叉する斜行条線文により横位の羽状文を構成する。千曲川上流の佐久地方に見られる土器で、長野盆地では珍しい。このほかに粘板岩製(10)・砂岩製の砥石(11)が出土している。

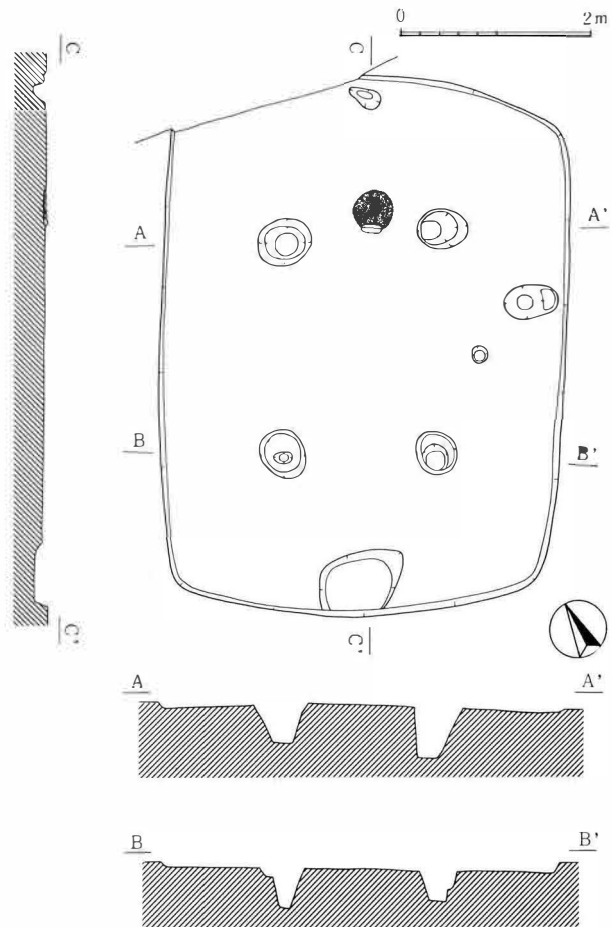


図52 50号住居



50号住居（南西より）



50号住居の炉

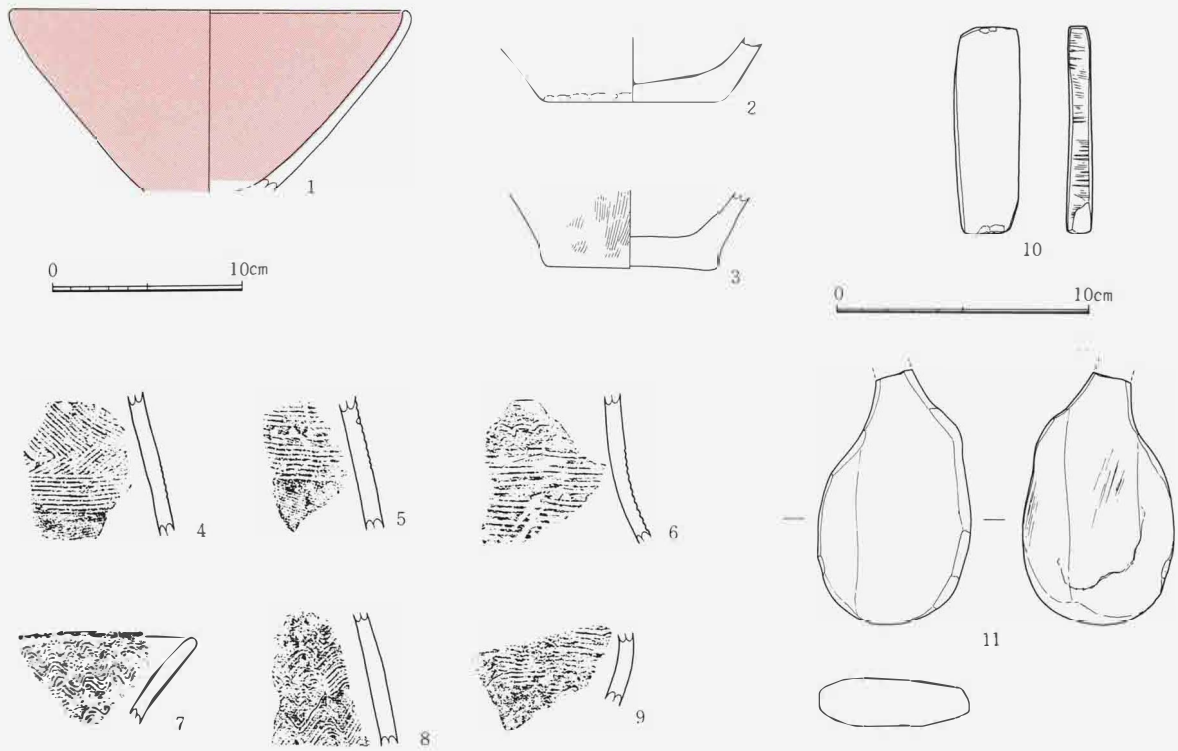
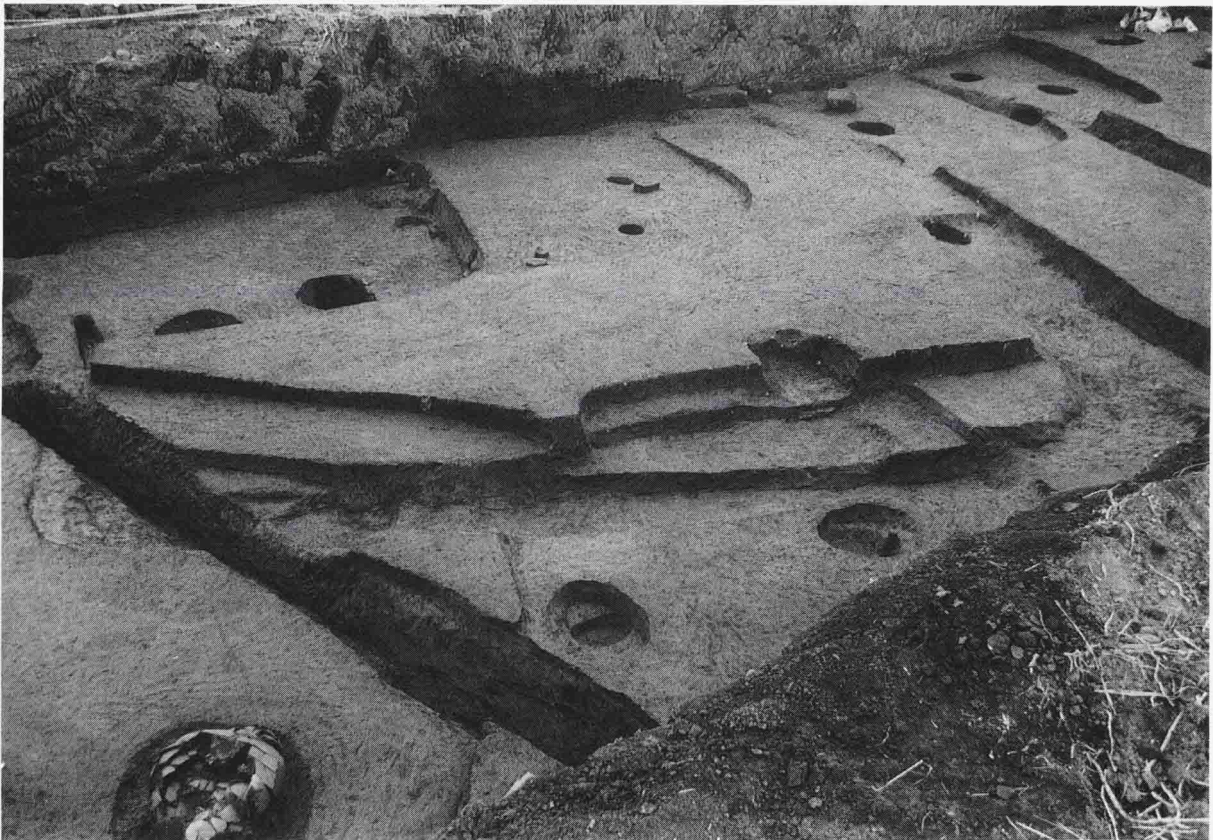


図53 50号住居出土遺物 (10・11- $\frac{1}{3}$)



2号溝・3号溝 (南西より)

2号溝

20・22・37号住居を切り込み、15・21・29号住居及び3号溝に切られる。東西、南北外縁幅は共に約9mを測る方形状を呈し、全周するものと思われる。溝幅は1m前後で、全体に浅く東側は最も浅く28cmである。最も深い南側で検出面から48cmを測る。また東溝中央に柱穴状ピット、北東隅・南東隅に落ち込みが見られる。性格として方形周溝墓を推定するが、埋葬施設としての主体部は確認できなかった。

遺物の出土は少量にすぎない。器種には壺・甕・高坏（図54）があるが、図示できるものは1点にすぎず、他は小破片である。高坏は外面及び坏部内面は、ていねいにみがかれ、赤色塗彩が施されている。

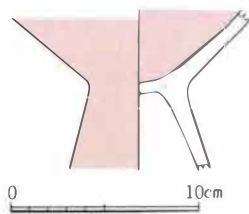


図54 2号溝出土遺物

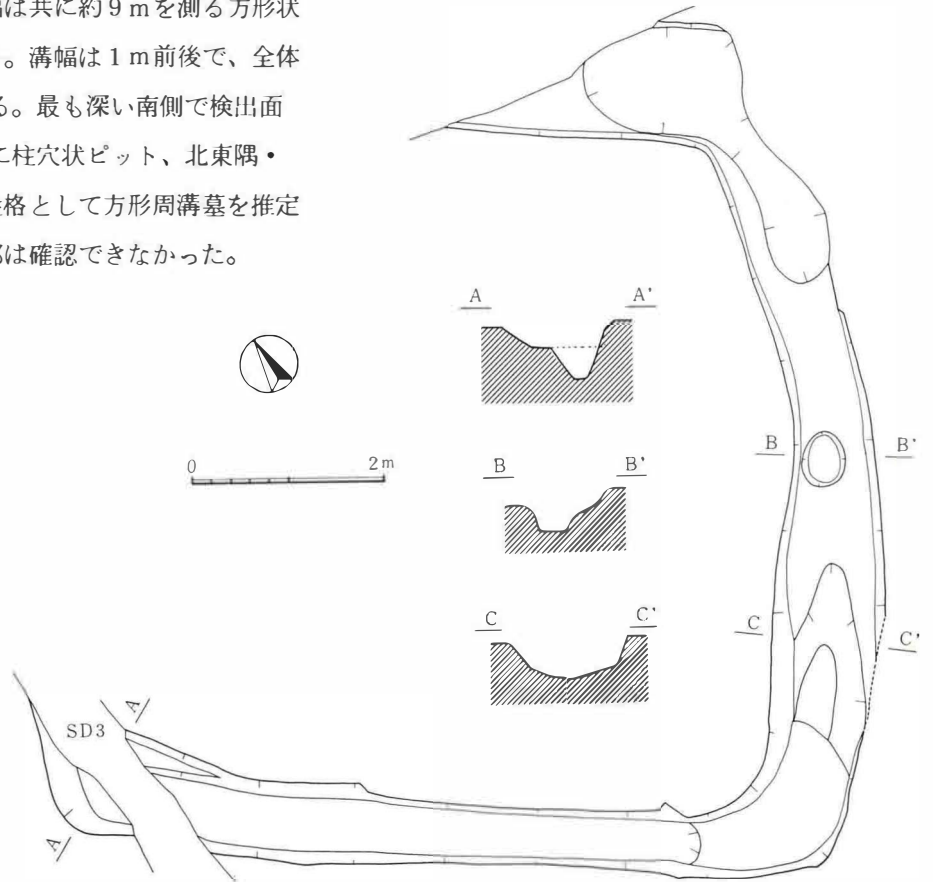


図55 2号溝



4号溝覆土の堆積状態



2号溝・3号溝（東より）



2号溝・3号溝（北東より）

3号溝

22号住居・2号溝を切り込み、29号住居と重複関係にあるが、4号溝との前後関係は不明である。溝の走行は南北より若干西にふる一直線のものである。形状はV字形に近い深い掘り込みであるが底面は平坦になる。最大幅90cm内外、検出面からの深さ56cmを測る。この遺構は方形周溝墓に關与するものと考えられる。

遺物の出土量は少ない。器種には壺・甕(図57-2~5)・赤色塗彩が施された高坏(1)がある。このほか凹石の用途にも利用された砂岩製砥石(6)が出土している。

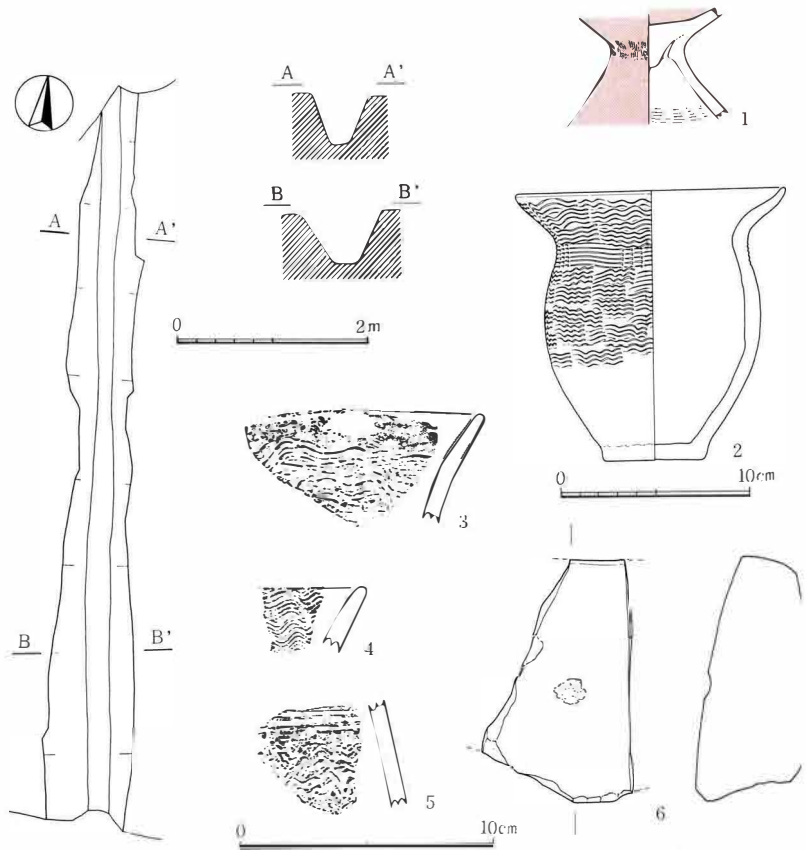


図56 3号溝

図57 3号溝出土遺物(6-1/3)



3号溝・4号溝(南東より)

4号溝

29・39号住居に切り込まれ、28・32号住居を内包している。調査では南側半分ほど検出したにすぎない。東西外縁の計測値は11.4mで、南北は不明である。溝最大幅は1.5mを測り、深さ1.1~0.64mの大形の溝で、形状はU字形を呈している。東西軸線は2号溝とほぼ同様で、両者とも重複関係がなく、また隣接していることから両者は意識的に前後して作られたものと思われる。主体部は確認できなかったものの、方形周溝墓の性格を考える。

遺物の出土量は少ない。器種には壺(図59-3、図61-2)・甕(図59-4~8)・高坏(1・2)・浅鉢がある。図61-2の壺は22号住居と重複地の覆土上層から出土した。算盤玉形体部に外開する有段口縁が付される。体部に焼成後の穿孔がある。ハケ調整痕が顕著である。

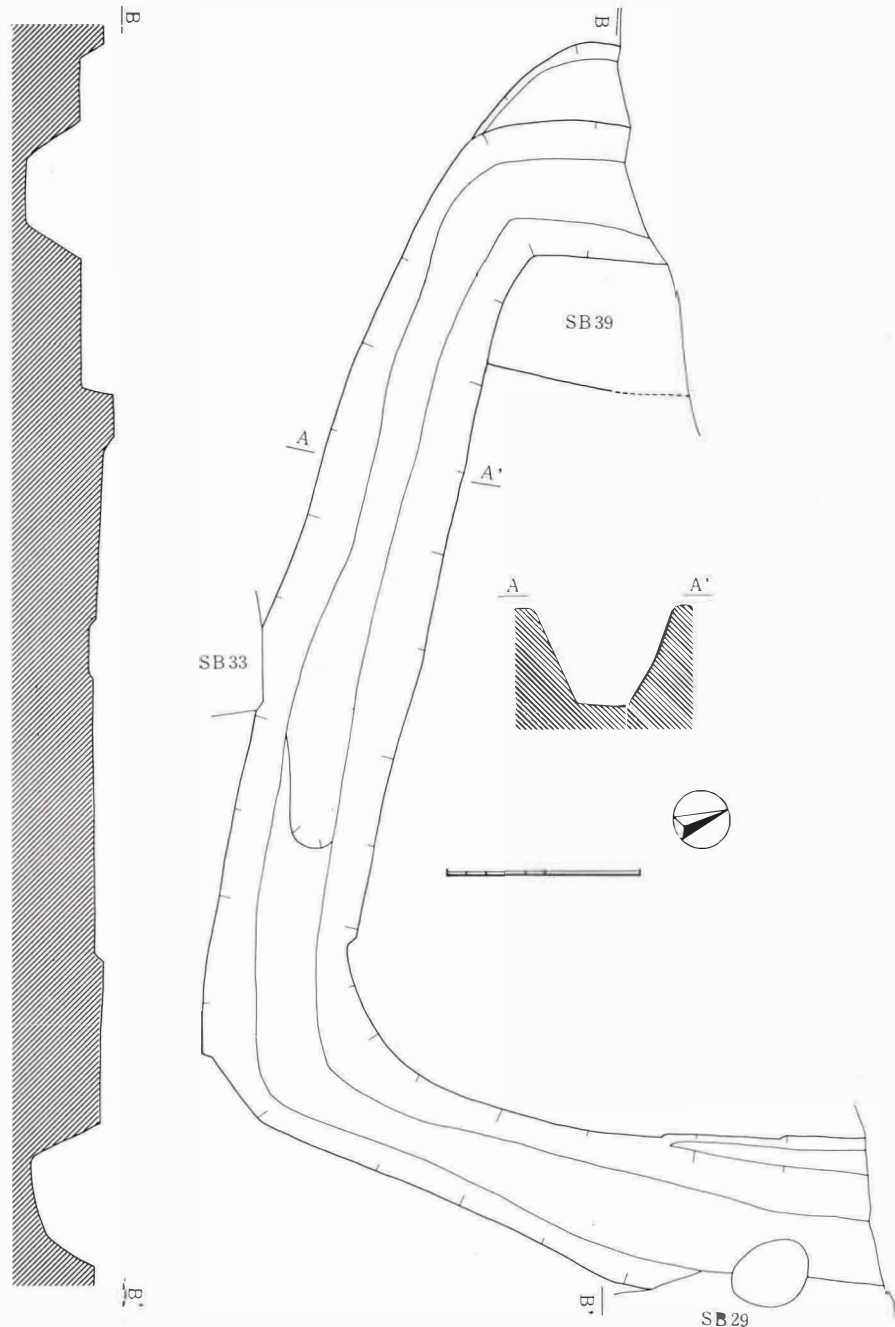


図58 4号溝

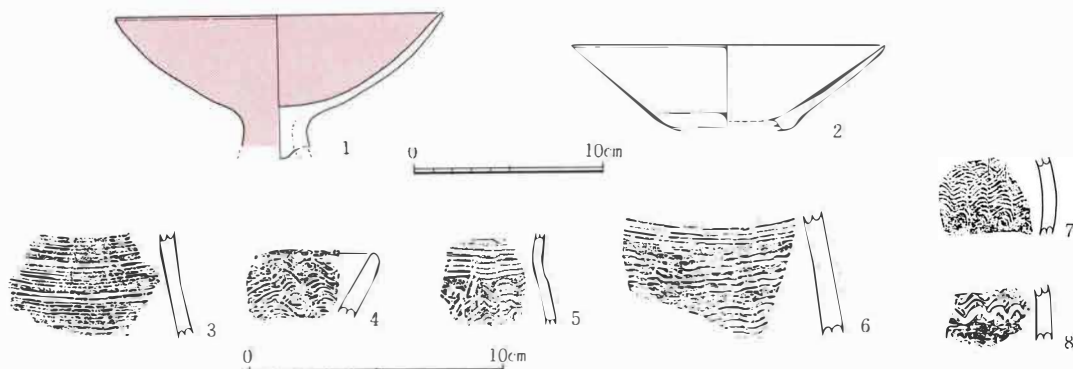


図59 4号溝出土遺物①